

325  
399

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始





新井石禪師述

佛教  
道德  
修養  
訓話  
全

東京  
教文社

25  
532  
72



325-399



新井石禪師述

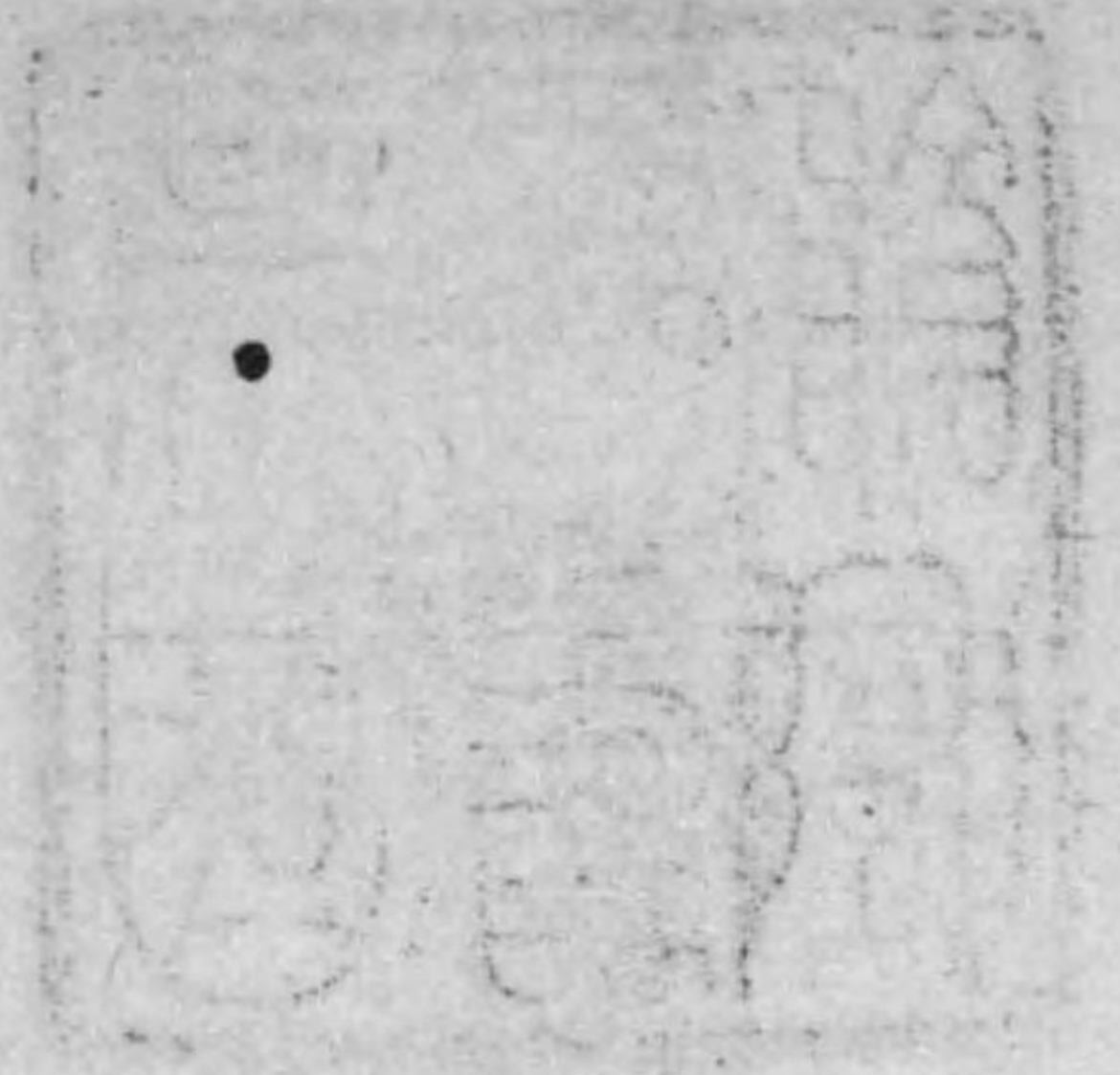
佛教  
道德

修養訓話

全

東京  
教文社

大正  
5. 3. 15  
内交





はしがき

新井石禪老師、南船北馬、四方に接化せられ、席暖るに遠あらざるも、その間、毎月、筆を呵して『道之枝折』誌上に法話を稿し、翰墨の法輪を轉ぜらるゝもの數十篇に上る、今、修道の士の切望に依り、その數篇を蒐集し、老師の御肯諾を仰き、剗腕に附す、惟ふに江湖求道の士に取りては、霧海に南針を得、闇室に孤燈を點するの感あらんか。

大正五年三月吉日

編者識



佛道  
修養訓話目次

第一講 修養の五大標準……………一

- 一、喜ぶべき現象。二、無数の義務。三、親切なる教訓
- 四、慈悲の妙行。五、恭敬三寶。

第二講 宗教的生活……………二〇

- 一、二様の生活。二、精神的生活の状態。三、凡夫と智者。
- 四、天地は一大慈悲體。五、佛界生活。

第三講 信仰と道德……………三九

- 一、信仰の必要。二、二種の信仰の一致。三、麗はしき
- 實例。四、まごころ。五、信仰は道德の母。



第四講 安心禪話…………… 六三

- 一、人生と安心。二、消極的安心。三、積極的安心。
- 四、理想的安心。五、佛教の目的

第五講 最高の人格…………… 八二

- 一、人格を養成するは人道の本。二、三等の人格。三、忍耐と勤勉。四、最高の人格。

第六講 御聖徳一斑…………… 九八

- 一、罔極の天恩。二、絶大なる御聖徳。三、御真情の發露。
- 四、皇后陛下の御坤徳。

目次終

佛敎 道徳 修養訓話

新井石禪述

第一講 修養の五大標準

喜ぶべき現象

明治維新以後歐米諸國に於て開展せる文明の空氣が種々の形を以て我國に輸入せられたるより、我國は攸々汲々として範を歐米に取り以て我が文化の發展を謀りたる爲め僅々四十餘年の間に驚くべき速力を以て開明の域に進み、殆んど別天地の如き成績を擧ぐるに至つたのである、併し一利一害は數の免がれ難き所にて之れが爲めに國民の教化に一大動搖を來たし、其結果として思想の混亂、或る意味に於ての道徳の頽廢を招く様なことになつたのである、而して社會の教育、民心の指導といふものに至つて

第一講 修養の五大標準



は全く霧海に南針を失ふたかの如き觀さへあつた様に思はれる、政府も國民も今更の如くに打驚きて、此缺陷を補填するの必要を感じ、その結果として精神修養といふ聲が在々處々に響き渡り、修養に非ざれば夜も日もあけぬといふ有様になつたのであります、是れ全く政府及び國民の自覺心が強くなつた爲めであらうと思ふ、それかあらぬか此處十年許りこのかた、佛教が地方改良、社會改善に關し最も重要な資糧と認められて來りしは争ふべからざる事實であります、従つて各地方ともに頗る眞面目なる求道者や信仰家がポツ／＼現出するに至つた様に認められる是れ寔に喜ぶべき現象であります、その結果教育家と佛教家とが漸次に接近し、教育家は佛教を以て教育上の目的を大成するの機關となさんとし、佛教家は益々本來の面目を發揮して國民の教化に資せんとする様になりつゝある様に思はれる、迂柄の經驗する所では正しく斯く認め得るのである、まだ十分に行き涉つて居るとはいはれぬが慥かにそういふ傾向を呈して居るとは明らかである、推古天皇の御代に御發布になつた十七憲法の第二條には「篤く三寶を敬ふべし三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗、何れの

世何れの時か此法を貴ばざらん、人尤惡鮮なし能く教ふれば之れに従ふ其れ三寶に歸せずんば何を以てか托れるを直ふせん」とあるが、是れは正しく佛教を以て我が國教と御定めあらせられたものです、而してその國教といふのは我國の教育及び一切教化の大本とせられたものであらうと思ふ、教育の目的は人をして完人即ち圓滿なる人たらしむるにあることはいふ迄も無い、然らば圓滿なる人とはどんな人かといふに、その標準は時代の要求に依て定めねばならぬとは勿論ぢやが、その根本を道德に置くべきこともまた勿論であります、我が國民の上でいへば教育の御勅語を奉じて忠友和信の徳を修め、以て智を啓き世を益する底の人で無ければならぬ、此徳を全ふする所以のものが即ち修養である、而して此徳は位の高下と職業の如何とは拘はらぬ、苟も人として此世に生れ、生れた丈の効果を擧ぐるには如何なる人でも、此修養を廢する譯にはゆかぬ、廣き意味からいへば宗教も教育も皆な修養の機關であります、人は生れ乍らにして絶待の惡人は無いに依て、「人尤惡鮮し能く教ふれば之に従ふ」と仰せられたのです、併し之れと同時に絶待の善人も無い「天然の釋迦なく自然の彌勒なし」



で聖人たり賢人たり菩薩たり佛陀たるは皆な修養の力に依らざるは無い、されば教育宗教等の修養機關を借らざる者は人と生れても禽獸と大差は無いことは野蠻國の狀態を見ても明了です、彼のアフリカの南岸ギニア地方は最も甚だしき野蠻國なそうぢや、その地方には猩々の一種チンパーデーと稱する動物が居る、彼等は畜生ながらも木骨や草を以て日光と風雨とを避くべき屋を構へ雌雄同棲して恰も一夫一婦的の團欒たる家庭を作つて居る、所が人間の方が却て夫婦の紀律も無ければ親子の見塚も無いといふ有様であるので、此地に旅行せる宣教師などが、土人に諭して、「猩々でさへも彼の通り家庭に紀律があるでは無いか」といふと、土人は平氣で「だつて吾等は人間だもの猿などの真似は出来るものか」といふて居るそうです、これでは人間と畜生との優劣が顛倒して居るといはねばなりません、又オースタリヤの土人ベンガイ族などは總て裸體で着物を被ることを知らぬ、同族中に死亡者あれば其死體を日光に曝しジク／＼と湧き出づる油を常にこすり各自の身體になすりつける、若し異部落の者を捕へて殺せば其死體は焙つて喰つて了ふ、彼等の珍味とする物は蛇であると申すことぢや、

や、ボルネオ島の中央部に居る蠻人のダイヤと稱する一種族は所謂有尾族で尻尾が生えて居るそうです、その父親杯が老耄すると樹木に登らしめ下より毒矢を以て射殺して其肉を喰ふといふことぢや、丸で御話にならぬ淺ましい状態です、併し今の文明國と雖も太古時代には之に類似したこともあつたであらうと思ふ、然るに教育の道開け宗教の化が行はれた結果漸々に發展して遂に今日の文明を見るに至つたのである、故に人は修養の力を借る時は無限に發達すべき性能を有して居るから萬物の靈長であるが、若し修養の力を借らざれば却て萬物の劣惡となり去ることを免れぬ。

## 二、無數の義務

抑も吾々人類は、一人一箇の身を以て限り無き多くの資格を有して居るものであります、世に「私は無資格である」といふ人があれど、それは公なる職務を有せぬといふことであつて、國家社會若くは家庭の一員としては數へ切れぬ程の資格を有して居るものです、親に對しては子といふ資格がある子に對しては親といふ資格がある祖父母に



對しては孫、孫に對しては祖父、母弟に對しては兄、妻に對しては夫、一人にして叔父たり姪たり從兄弟たり主人たり奉公人たり商人たり農民たり同業者たり同會社員たり國民たり縣民たり、郡民たり市町村民たり、算し來れば幾ど無數の資格を有して居るでは無いか、而して一の資格毎にそれ相當の義務があり職分がある、故にその義務職分を遺憾なく盡したるといふことは、實に容易ならざる事ではありませんか、況てや此世の中は種々様々の事情があり境遇があつて決して意の如くなるものには無い、「朝夕の飯さへこはしやはらかし思ふまゝにはならぬ世の中」で老人の氣に入る様にすれば若い者の氣嫌が悪い若い者の氣嫌を取れば老人の氣に入らぬ、前に好ければ後に悪く右に順へば左に背く、此間に立つて程よく調和を取ることが實に是れ難事である、難事である處から腹も立つたり我見も起つたり愚痴も出たり嘘をも吐く様になりたがるのである、斯く複雑なる世の中に在り乍ら平和にして且つ幸福なる生涯を送るのみならず進んでは此世の中の開發と進展とを圖るといふことは實に容易ならざる大責任です、是れが修養の一日も等閑にすべからざる所以であります、されど諺にいふ

一處透れば千處萬處一時に透るの理で、能く己れを治め己れを盡す時は知らずく無限の義務をも職分をも全ふすることが出来るものであります、己れを治むる本は信念である、信念に二方面がある、一には己れを信ずること、二つには他を信ずることです、己れを信ずるといふは、己れの本性を信ずることである釋尊は「一切衆生皆如來の智慧徳相を具す」と仰せられた承陽大師は「釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり」と仰せられ、常濟大師は「人々悉く道器なり日々是れ好日なり」と仰せられた、然れば吾々御互は此儘の佛である道の器である智慧と徳相とを具有して餘す所は無い、徹底此理を信じて自ら其身を尊重し愛護し長養することあらば自づと力を修養に注ぐ様になるものです、次に他を信ずるとは所謂理想的本尊を立て之に向つて歸仰の念を捧ぐることである、宗教にせよ教育にせよ、必ず永遠に歸仰すべき理想的主體を立てることが大切である、我が佛敎に於て、佛と法と僧との三寶を本尊として歸依し奉るには正しく理想的標準として歸仰するのである、尤も佛には我等を救濟し玉ふ所の慈悲光明あり法には我等を感化し教導する權威あり、僧には我等を啓發し指導する徳用あり、然れ



ども徒らに其濟度に依頼して自己の修養を閑却してはならぬ、故に華嚴經には「自ら佛に歸依し奉る、當に願はくは大道を體解して無上心を發せん、自ら法に歸依し奉る、當に願はくは深く經藏に入りて智慧海の如くならん、自ら僧に歸依し奉る、當に願はくは大衆を統理して一切無礙ならん」とある、然れば佛に歸依し奉るのは佛の所證の大道を悟らんが爲めである、法に歸依し奉るのは自己の眞智を開發せんが爲めである、僧に歸依し奉るのは和合の功德を成就して平和の生活を營むが爲めである。

### 三、親切なる教訓

優婆塞戒經には修養の五大標準を示されたが、洵に御親切なる御教訓です、その第一は「己身の中に於て輕想を生ぜず」といふのである、是れは自己を尊重する事です、寶を寶なりと知れば自づと之を尊重するものです、僅かに一面の鏡でも一軸の書畫でも、これが得難き貴重品なりと識得せば、大騒ぎをして之を保護するは人の常情です、況や寶の中の重寶は此身であると深く確信するのは正しく修養の第一歩であります

す、承陽大師は「今我等宿善の資くる所に依りて已に受け難き人身を受けたるのみにあらず遇ひ難き佛法に遇ひ奉り、生死の中の善生最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること莫れ」と仰せられた、然るに佛教といへば厭世主義の如く思ふのは大なる誤解です、尤も經論の中には、厭世的厭身的の教へも澤山あれど、それは人生の缺點弱點を擧げて衆生の執着心に警誡を加へられたのです、若し執着の妄心を解脱して修養に力を盡せば、所謂「無明の實性即佛性幻化の空身即法身」で此身は正しく佛陀正覺の體である、従つて自利々他の大功德は皆な此身より生み出さるゝものであります、第二には「自身に苦を受けて心厭悔せず」是れは忍辱の行である忍辱とは他より恥辱を受くることもあるも忍び耐へて忿怒の情怨憎の念を起さぬこととて所謂忍び難きを忍ぶの義である、換言すれば堪忍のことです、此世を娑婆といふ娑婆は梵語、譯して忍土といふ、乃ち堪忍世界と申すことぢや衆苦身に迫り衆難己れを襲ふ、是れ即ち人生の常態とす之を忍び耐へる力が無ければ一日も生きては居られぬ、況や修養に志す者の如きは先づ以て忍耐の力を養ふことが必要で



す、故に自身に所有苦惱を受くることあるも、これを當然の事と覺悟して少しも厭ひ悔ゆるの念を抱かぬことである、西哲の格言に「女は弱しされど母は強し」といふがある、女性はその體格といひ氣質といひ男子に比較すれば柔弱いものぢやが、一旦母となりて其子に對する時は其忍耐力の大なる到底男子の及び難き所である、子の爲めには寒暑をも厭はず風雨をも嫌はず殆ど其身を忘れて力を愛育に盡して居る、吾々は全く母の忍耐力に育てられたものです、故に釋尊は遺教經に於て「忍の徳たる持戒苦行も及ぶ能はざる所なり能く忍を行ずる者は乃ち名づけて有力の大人と爲す」と仰せられてあります、第三には「勤行精進休せず息まず」とある、これは精進行です精進とは食物のことでは無い、精はクハシク進はス、ム乃ら餘念を雑えず他岐に涉らす唯だ一心に正道に向つて勤勉努力することである、忍耐と勤勉とは兄弟姉妹の如きもので、此二つが活動の本であります、忍耐は消極的の力で勤勉は積極的の力である、此二大力が相依り相扶けて如何なる盛徳大業をも成就せしむるものである、菩薩本行經には「夫れ懈怠は衆行の累なり、家に在りて懈怠なれば衣食も供はらず産

業も擧らず、出家して懈怠なれば生死の苦を出離すること能はず」とあるが、實にその通りぢや、精進力を有せざれば何事をも爲し得るものではない、而して勤勉の力は能く瓦を轉じて鏡となし石を化して玉となすの作用がある、古歌に「苦にやむな金は世上にまいてある欲しくばやろう働いてとれ」天地の恵む實は無盡藏鎌で刈り出せ鎌で掘り出せ」苟も勉強の力を加へて休まざる時は、石の中からも藪の中からも多くの寶を産み出すものである、然るに人といふ者は兎角放逸を貪ほることが一種の慾望となつて居る様に思はれる、非常な勉強家があつても、君はそんなに働いてどうする積りぢやと聞くと、樂をしたいからさと答へる人が多數ある、是の如くなれば勉強の爲めに勉強するに非ずして安息を得んが爲めに勉強するのである、それでは眞の精進とは申されぬから釋尊は不休不息なれと説かれたのです、勉強には期限は無い、斃れても已まぬ死しても退かぬ、娑婆往來八千返、盡未來際の精進でなければならぬ、占部兼好も「業の成ると成らざるとは勤むると惰るとにあるのみ、故に不肖も勤れば賢となり、智も惰れば不肖となる」といふた、併し精進を以て苦痛の事と思ふてはなら



ぬ、眞正の樂みは勉強に由て得られる一日勤むれば一日の樂みあり一年勤むれば一年の樂みあり、無限に精進する者は無限に樂みを得るものであります、阿彌陀如來の御淨土を極樂世界とも稱す極樂とは樂みの最上にして無限なるをいふ、然らば如何様な事を樂むのであるかといふにツマリ佛事を行ひ佛徳を修むるのが、極樂淨土の衆生の仕事である、佛事を行ふが故に身に束縛なく佛徳を修むるが故に心に煩悶なし、而して日夜に精進して其法身を養ふに依て安養世界と申すのである、若し極樂に行けば寢て暮せる甘い物が食べられる面白い物が見られる、掃除をせずとも座敷が奇麗で、勉強せずとも財寶が得られる處だ杯と思ふて、往生を願ふとすれば、阿彌陀如來の御迷惑は如何許りであらう、世には随分そんな欲望から往生を願ふ者もあると申すとちや、さて〜淺ましき極みであります。

#### 四、慈悲の妙行

第四には「衆生無量の苦惱を救済す」是れが慈悲行です、前の三大行も畢竟は衆生

救済の一行に歸結するのであります、衆生界といへば佛教では三界六道と説いてあるから、決して人類のみに限つた譯では無い、顯界もあれば冥界もあり此土もあれば他方もある、無限なる宇宙の間に無数の衆生が充滿して居る、その衆生全部が吾人の對機である、故に釋尊は法華經に於て「今此三界は皆是れ我が有なり其中の衆生は悉く是れ吾が子なり」と仰せられた、三界といへば欲界と色界と無色界とて之を六道とすれば地獄餓鬼畜生修羅人間天上です、所有凡夫界を總括して三界六道といふたのである、その三界をば我が有ちやといはれたのは、釋尊教化の領域であるどとの仰せてあります、故にその三界の中の衆生は畜生までも皆我が子であるぞや、我れは此等の衆生の救護者たるべき親であるぞやとは、如何にも親しき御仰せではありませんか、世に親子の情愛ほど親密なるものは無い、殊に親の其子に對する愛念の如きは全く天性の發動であつて、恰も源泉の湧出づるが如く毫も人力を以て按排した譯では無い、佛教に於て殺生を戒め肉食を制したのも正しく此佛心の發動たるに過ぎぬ、今日の吾吾とても是の如くに慈悲心を涵養したいと思ふ、獨り釋尊の教を奉ずる者のみに限つ



たどては無い、法性自然の徳として斯くあらねばならぬものです、儒教にても、「其聲を聞いて其肉を食ふに忍びず」「恩禽獸に及ぶ」とか申してある、基督教信者でも頻りに動物の愛護といふとを主張して居る、さればとて極端に殺生を禁ずるといふ様なものは不可能であるが、縦ひ營業等の爲め殺生するにせよ、其代りには一面に於て普通人に勝れる程の慈善行を致すが宜いと思ふ、御上が御獵杯を遊ばすのは單なる殺生では無く、全く特別の意味があらせらるゝのであるが、一般人が運動の爲めや慰みの爲めに一種の遊技として銃獵をするが如きは何となく淺ましく感ぜられる、罪も無い害もない柔和なる動物の生命までも虐殺して己れが快感を満足するといふのは、全く獸性の餘習である、斯る無慘などを以てせねば樂むとが出来ぬといふは正しく道徳の低下を示すものであります、かういふ人々の如きはせめて一ヶ月の中に三日なり五日なり精進日を定めて、その日には殺生もせず肉食もせぬといふ様に致したならば、徳性を養ふ上に非常な効果があるであらうと思ふ、併し世には動物は可愛がるが人間には不親切ぢやといふ者もある、是れは顛倒の慈悲で矢張一種の病である、昭憲皇太后の

御歌に「よろづ民すくはむ道も近きよりおして遠きに行くよしもかな」とおほせ玉へし如く、先づ以て父母兄弟親族を始め社會同胞に對して慈念博愛の誠を盡し、進んで一切の動物に迄恩光を被らしむる様にせねばならぬ、吾々人間の上だけで見ても此世は正しく苦惱の世界不安の國土である、水と火と風とを大の三災といひ、刀兵と疾疫と飢饉とを小の三災といふ、此等大小の災禍は時々刻々に吾々の身を襲ひ來りて一日も一刻も油斷はなりませぬ、苟も人生の缺點と弱點とを觀察し來つたならば暫時も之を打捨て、置くことは出来ぬ、故に諸佛菩薩は三祇百劫とて無く未來際を盡して之を濟度せんとの大誓願を發し永劫不退に救濟を事とせらるゝのである、吾人も亦宜しく此慈悲の妙行を營まんことを期すべきである。

### 五、恭敬三寶

第五には、「常に三寶微妙の功徳を讚す」とある、三寶とは佛法僧です、佛は三界の導師である、佛の説き玉ふ所の法門は吾人をして轉迷開悟せしむる方軌であるその法



門を習修し傳承するのが僧である、吾人が成佛の目的を達し解脱の妙果を成ずるのは正しく此三寶の恩力であるから、中心に之を讚歎し感謝し崇敬してゆかねばならぬ讚歎すると申しても唯だ口の先で賞揚ることのみをいふでは無い、中心より隨喜し歸敬するのが眞の讚歎である、故に此一條は信の一字に歸します大莊嚴經には「一切諸の功德は信を以て使命と爲し諸の寶の中に於て信の財を最第一と爲す」ともあり梵網經には「一切の行は信を以て首と爲す衆徳の根本なり」ともある、己れの我見我慢を打捨て、至心に佛を信する時は、吾人の胸中は澄然として明鏡の曇りなきが如くになりて嘘も偽も無くなる、虚偽の無い心は天心に合するに依りて自然に貪欲も瞋恚も愚痴も消滅するものです、さすれば佛心と吾々の心とが合體するから、三寶無礙の功德は吾人の身心に充ち渡る様になります、此時こそは此身はソツクリ佛陀大悲の光明と感應道交するに依て、遍法界の法身を感得することが出來ます、これが信心所成の大功德であります、以上五種の心得は吾々が常々に言ふことであるが、單に言ふた許りでは何等の所得も無いに依て、是非共之れが實行を期することが肝要です、森田悟由

禪師の如きは最も實行に努められた御方であつて、其一進一退一舉一動の上になで圓熟したる修養の力が現はれて、渾身是れ佛法とも謂ふべき御境界であつた、禪師の行持には更に表裏はあられなんだ、只御一人で内寮に御在の時でも決して行儀を崩される様なことはなく、三時の食膳に向はれてはドンな御氣に召さぬ食物でも、小言をいはれたこと杯は唯の一度もあられなんだ、天物を護惜するの御思召より、紙一枚でも糸一本でも龜末にされるといふことは無く、膳部に對する時の如き、食べ切れぬと思ふ物は一向に御手をつけられず、御手のついた物は必ず食し盡して其汁や滓までも可憐に洗ふて湯や水もろともに奇麗に召上がるのが常であつた、而してその勤勉なることは驚くべき程で、御遷化前五日迄は日々讀書を以て樂しみとし、倦み來れば端座し、毎夜多くは十一時十二時、時としては午前一時頃までも御寝なさらなんだ、殊に多少身體に不安のあることがあつても病苦を訴ふるといふことは斷じて無かつた、御遷化當時でも矢張苦しいとか難儀なとかいふことは更に仰せられなんだ、迂柄が傍に侍して「御氣嫌はいかゞ」と御尋ねせし時に「良くもなし悪くもなし」と答えられ、



「御腹の工合が悪ふございますか」と申し上げしに「悪くないでも無い」といはれたことがあつたのみです、年中日本全國を御巡錫なされたが、平生の御話に「山僧に定まれる住處なし、海内至る處我が本家郷で錫杖の駐する所が山僧の涅槃臺りや」と仰せられた、又御運動といふことをなされず、終日終宵案頭に向つて端坐し又讀書のみをして居られました、或人が「禪師は如何なる運動を遊ばすや」と問ひしに「老衲は運動せざるを運動とす」との御挨拶であつた、此御一言の如きは何となく無限の趣味を感ずるではないか、高祖大師が詠せられた「水鳥の往くも返へるも跡たえてされども道は忘れざりけり」の御歌でも拜する様な感じがします、吾々も亦常に不動の地に安住して以て大々の活動をなさねばなりません、不動の地に安住するといふは見聞聲色の爲めに動搖せられぬことです、此地に到るの法門は坐禪と信仰とです、坐禪に依りて一心の動搖を制し、信仰に依りて諸佛の慈光に照され永遠の福利も無限の妙樂も皆な此中より生じて來ます、併し坐禪を學ぶには正師家を得ることが必要です内に熱心なる志がありて正師家に就て教を受くることを得ば、如何なる人でも立派に坐禪を

修むることが出来る、又信仰を勵むには第一に心中に蘊む所の疑心と邪念とを一掃することが大切です、世に貪欲を充さんが爲めに信ずるのがある、苦しい時の神頼みは大概これぢや、それも正義を守りての祈願ならば宜いが往々利己主義貪婪主義より神佛を利用しやうとするのである、實に以ての外のこと、此等は道德上恐るべき惡結果を來すものです、又瞋恚を漏さんが爲めに信仰するのがある、己れの惡む所の者に懲罰を興へて貰ひたいと祈るの類です、又愚痴の上から信ずるのがある、縁結びの神とか佛とかいふて哩々騒ぐの類は概ねこれぢや、此等の信仰は邪信です、縦ひ邪信といふ程でないとしても、決して正信とは許されぬ、故に正信を得んと欲せば、先づ以て自己三毒の妄念を打拂ふて智徳の開發と衆生の救済とを、大理想とし、此大理想の彼岸に到達せんことを期し、三寶の拔濟引導を虔請するのが正信の基礎である、而して此二者を修め得ば諸佛の戒品も自づから備はり、自他の精神道德を益々健全に増進長養することが出来るものであります。



## 第二講 宗教的生活

### 一、二様の生活

凡そ人間の生活には二様の状態がある、一は有形の生活で、一は無形の生活である、即ち物質的生活と精神的生活である、財産の多少、位置の高下等は有形に属し道德の有無、快樂の厚薄等は無形に属して居る、世には物質的生活の上では、萬人に優れたりと稱せられて居り乍ら、精神的生活の上では最も悲惨を極めて居る者も多い如何に高位高官の地歩を占め金殿玉樓に棲みて綾羅錦綉を纏ひ山海の珍味に飽くとも、家庭の圓滿を缺くとか、一身に不道德の行爲があるとかすれば、それが爲めに精神上にはどれ程の苦痛を感じるかも知れませぬ、之に反して彼の顔回の如く、一簞の食一瓢の飲陋巷に在り乍ら、王侯貴人も及ばざる程の樂みを得て居るものもある。故に物質的生活と精神的生活とが相反する様な事實が澤山にあります、されば我々の此世に處す

るや、一面には勤儉力行して物質的生活の充實を謀ると同時に、一面には心を治め徳を養ひて精神的生活の向上を期せねばなりません、菜根譚に、「黄金至寶、非爲寶、廉節不貪吾所寶、白玉奇珍、不異異珍、知足無求自有珍」とあるは精神的生活の状態を消極的に述べたものです、乃ち黄金は世の至寶なるも眞の寶とはいはれぬ、清廉潔白にして能く節義を守り他に向つて非分の貪欲を起さざるが、道德の基本であるから、それこそ眞の寶である、白き玉は天下の奇珍であるが未だ以つて眞の寶とは稱せられぬ、足ることを知り分に安んじて他に求むる無きこそ修養の土臺であるから、此の中に自づと眞の寶があるといふ意味です、抑も吾々人間は肉體と精神と相合して始て人格を成して居るのであるから、何れを重んじ何れを輕んずるといふことは出来ぬ、併し人間の人間たる價値を判ずるには必ず精神を以て本とせねばならぬ、況や佛教に於て三界は唯心の所造と示されてある通り、三界の諸法苦樂趣きを殊にし淨穢相を分つも、其源は精神如何に依るのであるから、吾々は先づ以て精神的生活の基礎を確立し、而して益々その向上發展を圖らねばなりません、故に古來聖賢の道を學ぶ者は主







(佛界) 宗教的生活

本より佛界は最勝圓滿の覺位、菩薩界にも大權の聖者といふて、觀世音菩薩や文殊菩薩の如き御方もあり、又地上の菩薩や等覺の菩薩もあるが、今は利他的行持を専らとする君子を且らく菩薩に配し、二利双運の人を佛界に配して見た迄であります、先づ凡夫の最下の方から略説して見れば、一に怨嗟的生活とは煩惱と愚痴とに囚はれた人である、よしや相當の位地と資産とを有する人でも、諦めの悪い處から一種の愚痴に縛られて、誰れに向ても泣き言を吐かずには居られぬ様になる、此種の人は大部分は自ら求めて苦痛を招くのであるからどんな結好な果報を得ても決して満足は致されぬ「思ふこと一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つ六かしの世や」で、分に安んじ足るとを知り觀念の力を養ふとが無ければ一生涯苦み通しに苦まねばならぬ。其結果が腦病を發したり神經衰弱症に陥たりするのであります、是は正しく此世からなる地獄です、二に貪婪的生活とは利己的欲張根性一方の人です、義理を忘れ人情を忘れて唯自己一身の利益をのみ目的として居るのであるから、欲の爲めには親をも欺き友を

も欺き、甚しきに至りては詐偽もやり窃盜強盜をも爲すのである、法律上の犯罪者の大部分は何れも貪婪的生活の結果であります、法華經には「諸苦所因貪欲爲本」とありて、煩惱の中には一番悪い活動力を有する惡戲物は貪婪です、是れ正しく現世に於ける餓鬼道です、三に醉狂的生活といふは唯だ肉體の欲五官に觸るゝ一時的快樂にのみ耽る人をいふのです、飲みたい喰ひたい、面白い物を見たい面白い聲を聞きたい、寝たい休みたい、此外には何等の目的も無い、誰れやらの歌に「面影の變らば變れ年も寄れ無病息災死なばごつくり」只是れ丈が願望で理想も無ければ、信念も無いのであるから、丸て無我夢中の世渡りです、財産家の道樂息子や無教育な勞働者杯には此種の人が多いものぢや、こういふ連中は此世からなる畜生道です、四には奮闘的生活、是れは生存競争の激烈なる現今に處しては最も必要なる生活法です、政治にせよ實業にせよ教育にせよ宗教にせよ、總ての物が皆な競争的態度に依て進歩向上するのであります、優勝劣敗は天地間の通則です、禽獸蟲魚より草木瓦礫に至る迄、優勝劣敗の通則に支配せられぬ物は一つも無い、世の進歩につれて益々競争が激烈になる



は當然の結果であります、況や何事も世界を相手の今日では、常に奮闘的態度を以て一日片時も油断なく、他に抜んで優勝の地位を占むる様にせねばならぬ、併し人生の行路は恰も汽車の進行するが如く、如何程急速力を以て進行しても必ず履むべき鐵路があるに依りて少しでも脱線してはなりません、若し履むべき線路を履まずして無暗に奮闘するのみでは、畢竟我見我慢の角突合となつて了ふ、黨派の悪弊などいふのも此脱線の奮闘の結果である、終には人を突飛しても踏倒しても構はぬといふ様な、横暴の振舞をも敢てする様になります、それでは折角の奮闘も感むべき修羅道に墮落し去るを免れませぬ、而して單に奮闘のみでは一生涯を徒らに競争の渦中に投じて少しも安心といふとが無いから、寧ろ感むべきものであります、五には榮譽的生活、是れは名譽を以て畢生の目的として居るものである、我が國の武士道の如きは名譽を以て泰山北斗よりも重んじて居る「いのちより名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなれば」名のために棄つる命は惜からし終にとまらぬ浮世と思へば」といふ歌の如きは、正しく武士道的精神の一面を詠じたものです、併し眞の武士には武士の道とい

へる一大中心があるから、唯だ名を擧げ譽れを求むるといふのみでは無い、乃ち忠義の名譽を重んずるのであつて不忠不義にして得る所の名譽は最も耻辱として居るのである、故に名譽を貴ぶといふ心の底には高尚優美なる一大信念が蟠つて居ることを忘れてはならぬ。之に反して唯だ自分丈好い兒になろう好い顔をしよう好い位置に昇らうと思ひ、それ丈が目的であつたならば、その目的を達する爲めに他人の名譽を嫉んだり、他人の光榮を惡んだりして、高貴自負の念をのみ逞しよする様になる、乃ち働かず居ながら働さ者と見せかけたり、卑き身分であり乍ら氣高い様な風をしたり、して、自づと虚飾虚榮の邪路に踏み込む様になりたがるものです、北越の豪傑河井繼之助の語に「無くてならぬ人となるか有てならぬ人となれ、沈香もたけ屁もこけ」とか「牛羊と爲て人の血肉に化せずんば豺狼と爲て人類の血肉を喰ひ盡せ」とか「身を棺槨の中に投じ地下千尺の底に埋了したる以後の心に非ずんば與に天下の經綸を語るべからず、道義道德も夫からの事だ」とかいふ激語がある、これは人生の無爲を誠めたる慷慨悲憤の言語ではあらうが單にこゝにいふ志であつたならば天下に名を成す



といふ目的の爲めには、毫も手段の如何を顧みぬとなる、是れは甚だ危険なる思想と申さねばなりません、併し人道を守りて榮譽を重んずる時は所謂「身を立て道を行なひ名を後世に揚げて父母を顯はす」といふ様な立派なる道徳的活動の基ともなるから、人の人たる言行は此人にして始めて實現せらるゝものであらうと思ふ。

### 三、凡夫と聖者

六には道義的生活、是れは名譽よりも利益よりも人道的義務を盡すを目的とするのである、彼の孔夫子が「富と貴きとは是れ人の欲する所なり、其道を以てせざれば之を得るとも知らず、貧しきと賤しきとは是れ人の惡む所なり、其道を以てせざれば之を得るも去らず、君子仁を去り焉んぞ名を成さん、君子は食を終るの間も仁に違ふと無し」といはれたるは、聖賢の志を示されたものではあるが、吾々御互とても道を重んじ道を貴び道の爲めには名譽も利益も犠牲に供して毫も惜まぬといふに至れば、是れ全く道義的生活の最高點に達したものであるから、人間の中の最も完全したる人

間であつて、取りも直さず十善業道を實踐し得べき天上界の衆生と稱すべきでありませ、併し此分際のみでは消極的保守的で積極的活動的で無い、殊に道義心が健全でも物外に超然たる所が缺けて居つては未だ凡夫地たるを免れぬ、故に以上の六種は善悪の別高下の差はあるけれども、齊く凡夫界であります、七に解脱的生活、是れより上は全く聖者の位地に昇つたのである、中に就いて解脱的生活とは萬境の爲めに束縛せらるゝ煩惱を解脱して別に高尚なる天地に逍遙する底の人である、彼の聲聞界の聖者は人我の見を離れて真空の妙理を悟り、生死を透脱して寂滅無爲の郷に入り以つて無我の三昧に住するのであるから、解脱的生活は全く聲聞的である、人生は恰も夢の如し何をか執し何にか着せん、徒らに名利の巷に走り憎愛の波に漂ふは、繩を以つて蛇と誤るよりも愚なり、萬兩の黄金も三寸息絶れば我が有ては無い、妻子眷屬も冥土の伴とはなり難し、無常轉變の世に處して徒らに幻の如き相に迷ふ、實に感れむべきの極みである斯く觀じ來れば世に處して世に縛られず物に對して物に動かされず「坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山人に見る」といふ境界に達せられます、世の



風流を好み文雅を愛する人抔も自づと此種の妙味を感得して居る様に思ふ、大我夢菴は悟達の人といふて居るが、その自記したものに「我むかし紙袋にて夏は蚊をふせぎ冬は寒さを防ぎ、楮菴主人と云ひ又は紙袋法師と云ふ、其袋にかさける「世の中を袋一つに入れ替へて思へば輕き我身なりけり」とある、區々たる名利に役せられず超然として天地の大道を樂む、こゝに解脱の妙趣が存して居ります、吾々も精神の修養上一度は此解脱の境に到達せねばなりません、八に理想的生活、理想的といふ語は少し曖昧であるが、ツマリ高尚なる妙理を悟り生死の因縁を明らかに宇宙の實相を了し、ソコに安心立命して居る人のとである彼の縁覺界の聖者は十二因縁を觀じて生死の根本を究めて大自覺を得て居らるゝに類した境涯です、生も死も苦も樂も皆な因縁の法である、その因縁の根本は吾人の一心である、一心の本體を究むれば法界平等にして毫末の差別も無い、佛様といふは此眞理を大覺して眞理に合致せられた境界であるから取も直さず佛様とは眞理のとである、一草一木も眞理の所現ならざるは無いからして、飛花落葉も佛の御光りと見るべきである、普通謂ふ所の縁覺は唯だ三世因縁の本

末を觀じて生死の原因たる無明の煩惱を斷するのであるが、我が佛教に於ける理想的生活は更に一步を進めて十方世界皆な眞理の現相と體達するのである、扱て此觀心が圓熟すれば「鳥語蟲聲總是傳心之訣、花英草色無レ非見道之文」と、菜根譚にもある通り、見聞覺知に觸れる所の一切の萬象は盡く諸佛の妙心、大道の實相と了するところが出来る、彼の蘇東坡居士が禪理を悟得して「溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身」といふたのも、皆な理想的生活の妙味に觸れたのであります、以上の二界は如何にも氣高くして奥床しい皎潔なるものであります、惜い哉濟世利民といへる慈悲的活動が缺て居る、乃ち佛心の消極的方面を體得しても未だ積極的方面を閑却して居るから、若し此位地にのみ安住して自ら足れりとせば、解脱の聖者とは謂はれませうが弘誓の大士とは申されませぬ。

#### 四、天地は一大慈悲體

そこで九には慈善的生活、乃ち菩薩乘の生活が必要になつて來るのである、慈善とい



へば貧困者とか無怙の老幼を救済することにのみ聞ゆるかも知れぬが、此處に所謂慈善といふは濟世利民を事とすることであるから、意味が大そう廣くならず、故に慈善的といふよりも利他的といふ方が適當であるかも知れませぬ、要するに己れの一身を犠牲にして他人に對し社會及び國家に對し他を利益すべき善行を施すことです、涅槃經には「諸有の善根は慈を根本と爲す」とあり、優婆塞戒經には「慈悲を離れては善法を得ること無し」とある。佛心とは大慈悲是れなりで、慈悲なければ未だ佛心を獲得した者とは言はれぬ、而して此慈悲心は人々本具せる情の作用であるから、如何なる人にも慈悲の性は備つて居る、情の中には他を可愛がる所の愛情がある、又他の苦痛を自分の身に引較べて思ひ遣る同情といふものがある、此同情と愛情とが慈悲心の基礎を爲して居る、されば親の其子を愛する、夫婦兄弟相互の愛情等は皆な天性です、又人には自づと忍びざる心があつて如何に残忍無頼の者でも惻隱の心を發して覺えず他を救ふとあるが如きは正しく同情心の流露です、加之、仔細に觀察して見る時は此天地間は一大慈悲體です、天は長へに覆ひ地は長へに載す、風ありて新鮮なる

空氣を送りて萬物活動の基を開き、雨あり普く濕ほして萬物生育の資を成す、日月は永く輝き水火交々扶け山澤氣通じ陰陽相順ふ、是れ皆な慈悲の妙用ではありませぬか故に慈悲ある人は能く天地の心に通じ、慈悲なき者は自から天地の徳に背くは、自然の道理であります、されば萬物の靈長たる吾々御互は常に慈悲の徳を養ひて慈善の行を勵まねばならぬ、世の中には若し慈善をのみ事とせば自分の身が立ち行かぬ杯と思ふ者もあらうが、是れは大なる間違です、承陽大師も「愚人謂はくは利他を先とせば自らが利省かれぬべしと爾には非ざるなり、利行は一法なり普く自他を利するなり」と仰せられて、利他の徳に依て始めて眞正なる自利が成り立つのである、試みに人道の根本たる忠孝の二徳に就て見ても矢張そうです、君主に忠誠を盡さんと欲せば、自己の一身を捧げて君國の犠牲となるの覺悟が無ければならぬ、如何なる欲望を抱くとも、君主の御命令に背くことは斷じて致さぬ、君主の大御心に反する業は斷じて行はぬ、乃ち己れの欲望を放擲して君主の御心に服従し奉るのである、租税を納むるも血税を拂ふのも、國法を守るも公益を廣むるのも皆なそれです、但し此れに却て自己



の獨立と自己の發展とが現はれて來るのである、父母に對するの孝行も亦同様であつて自己尊重主義では決して孝道は盡されぬ、自己を忘るゝの時始て眞の自己が獨露するのである、併し單なる利他的生活には必ずしも確實堅牢なる根據ありといふべからず、乃ち宗教的大信念が無ければ利他の根據が堅固で無いから、或は報酬を求むるの念が起つたり、若くは慈悲の行に倦怠の心が生じたり、又は非常に苦痛を感じたりすることが有り易い、茲に於てか更に一步を進むるの必要を感じずには居られませぬ、是れ則ち佛界生活であります。

### 五、佛界生活

第十に宗教的生活とは所謂佛界生活である、固より吾々御互が一足飛びに釋尊や彌陀如來の如き萬德圓滿の佛身を生ぜられぬことは言ふ迄も無いが、もし金剛堅固の大信念が發得されるれば、自然に佛心に相應して佛光明の中に攝取せられ、佛界中の人となることが出来るものと思ふ、此位地に進まんに先づ第一に宇宙間に一貫の大道あ

つてそれが實地萬物の實體であるといふことを確信せねばならぬ、次には、其大道は生滅なく憎愛なく法界平等にして絶對無限なることを信じ、之と同時に其妙用は一團の慈悲光明であるといふことを信するが宜い、而して次には御佛とはその大道の體現したる御境界なるを以て、佛の御心は常住不滅にして佛の御徳は慈悲攝取であるといふことを確信し、次には吾々も亦た大道の中に生れたものであるから、吾々の心身も自づと佛心と佛徳を具有して居るといふことをも確信すべきである、次には既に佛心佛徳を具有して居り乍ら何故に斯くも凡夫の位地にまごついて居るかといふに、是れは全く煩惱妄念の所爲であるといふことを省悟し、且つ一たび至心に懺悔して佛の御慈悲にすがり奉れば御濟度を被むることは疑ひ無し、而して佛の大誓願は常恒不斷に吾々を濟度せんと、佛の方より進んで待ちこがれて居玉ふのであるといふことを信せねばならませぬ、扱て前に述べたる如き各種の信念が綜合して、一團の大信念となりさへすれば感謝の念内に起り、報恩の情外に表はれ、無量の歡喜に満ちて無限の快樂身に溢れるものであります、佛に大解脱の徳あることを信じて之に歸依し奉る時は、



此信念の功德自づから一切煩惱の纏縛を解脱するものです。佛に大慈悲の徳あることを信じて之に歸依し奉る時は、此信念の功德自づから一切衆生に對して慈悲心を發動するものです。是が感應道交と謂ふのであります。さあこうなると彼の西行法師が「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる」と詠ぜし如く唯なにとなく有り難さが骨身に徹する様で嬉しうでくでならぬものです。是は佛恩感謝の至情と謂ふのであります。此至情が發しますれば、それが君主の感恩父母の厚恩衆生の恩分といふ他の三恩に對しても感謝せずには居られぬ様になるものです。例せば食時の際でも「はしとらば天地御代の御恵み父母や主人の恩を味へ」で自づと君主や父母の御恩を感ず、又「炭薪米麥豆に至るまでしづ山賤の汗と思へば自づと衆生恩の大きなことを感じ、同時に「食に飽き身の幸を悦びて飢に苦しむ人を憐れめ」で、衆生恩を感じると同時に衆生を濟度せんとの慈念を發する様になるのです。これが眞正なる菩提心である、優婆塞戒經には發菩提心に五事あることを説かれた、それは一には善き友に親しみ近づくこと、二には瞋恚の心を斷ずること、三には師の教誨に隨ふこと、

四には憐愍の心を生ずること、五には勤修精進すること、されど信念發起の人は自然に此五事を具ふるものであります。殊に今迄は前世の事も解らず未來の事も知らず現在に夢幻而して此身心は罪惡の凡夫なりと思ひし吾々こそは常住不滅の佛性を具有する佛心佛徳の器であると徹底確信したならば、その喜びは果して如何許りでありませう、瓦の變じて玉となり礫の變じて黄金となりしよりも百千萬倍の喜びではありませんか、そのみならず佛の御身は目にも見えず佛の御聲は耳にも聞えぬものなれが信心堅固なる時はその功德に依て、佛の御姿も信仰の目にはありくと拜せられ、佛の御説法も信仰の耳には偉大なる響を感じ、「一稱南無佛皆已成佛道」一念の信力は此身心を擧げて佛の大光明中に投入し行住坐臥佛の御懷を離れぬといふことがしみるゝと感ずることが出来る、さあそうなればその嬉しさ喜ばしさは果してどんなでありませう、此歡喜心が發しますれば、吾々が衆生利益の願行を營むのは取りも直さず佛の御仕事を爲すのである、佛の御仕事を爲すのがやがて佛の御恩に報ゆるのである、故に宗教的生活を感謝的生活とも報恩的生活ともいはれます、此生活を得る人は、常



に歡喜の心に充されて居るから、朝夕に愉快に楽しく日送りが出来、而して信念の結果として其希望は未來を期するに依て甚だ悠遠である、之れと同時に一期の終りに臨んでも前途に赫々たる光明を認むることが出来る又愉快なる人には如何なる辛苦をも凌ぐべき偉大なる勇氣を備ふるものであります、而して其心は天地の大道に安住して居るから、自然に浮世の俗情に縛られず、常に大慈悲心を發して起居動靜の上に拔苦與樂の作用を起すに依て日々の行持が知らず／＼忠義となり孝行となり恭儉となり博愛となりて無盡藏であります、以上十種の心的生活を一括して見るに三惡業道は格別として他の七階級を綜合して一大信念の下に攝入したのが宗教的生活である、故に此中には奮闘的勇氣もあれば、神聖なる榮譽健全なる道義も備はり、而して超然凡俗を解脱して高尚なる理想に住し同時に慈善的活動を現はし、自利々他相合して一大信念の下に歸入するのであります、故に吾々は今後益々修養して完全なる宗教的生活を營む様に心懸けねばなりません。

### 第三講 信仰と道德

#### 一、信仰の必要

本日は信仰と道德との關係に就て少しく御話しをいたさうと思ふ、信仰とは信じて仰ぐといふので、ツマリ吾々の精神を托すべき御本尊様を立て、其御本尊様の御徳及び御濟度の力を一點の疑ひもなく尊び敬ふて、之に頼りすがりて其御濟度を仰ぎ奉るが信仰であります、此信仰心は人間の能力の極めて微弱なる所より發する自然の要求であるから、其人の智識の淺深、理想の高低、希望の大小に依て自づから信仰の状態にも淺深高下のあるべきは勿論である、併し乍ら信仰の極度は決して理窟や經驗の力では達せられぬ、尤も或程度までは理性の判斷も想像の力も無ければならぬことは勿論なれど眞の極度に至りては全く、沒我の状態にてあらねばならぬ、渴して水を求むる時は、水の成分や元素の研究などをしては居られぬ、愈々其水を飲んでア、結好



であつたといふて言ふに言はれぬ快感を生じた時の心持も亦決して理論や説明の及ぶ所ではありませぬ、又病氣をした時に薬を飲むが如きも、薬の原料を調べたり薬劑學的的研究を施したりして居る餘地は無い、唯だ信じて之を服むの外は無いのである、併し水の好悪と醫士の適否とは豫め選擇するの必要あるが如く、本尊そのものに對しては能々之を選擇して而して後に信仰せねばなりませぬ、故に修證義には「徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し」と仰せられてある、されば若し自分で選擇することが出来なからば、世の指導者たるべき人の教を信じて信仰の目的を定むべきである、我が宗に於ては佛法僧の三寶を以て歸依處となして居るが、獨り我が宗ばかりでは無い佛敎各宗を通じて歸依信仰すべき御本尊は此佛法僧の三寶を出でませぬ、中に就て佛は中心の御本尊である、法は佛の御道德を解説して吾人の當に遵守すべき萬古の規範を示されたものである、僧は前に申した指導者である、ソコで吾々は指導師たる僧に依て始て法を知り法に依て正しく佛を信じ、以て永久の信仰を確立するのであります

信仰には解信と仰信との二つがある、解信といふは法の道理を領解し其道理を確信してそこに心を落附ることです、忠臣は義の爲めに命を捧げ、貞女は節操の爲めに身を忘れ孝子は孝道に心を傾け、學者は真理の爲めに全力を注ぐ、此等も亦一種の解信である、孔子が「富と貴とは是れ人の欲する所、其道を以てせずして之を得れば處らず貧と賤とは是れ人の惡む所、其道を以てせざれば去らず」といひ、「朝に道を聞て夕に死すとも可なり」といはれたのも、全身を道の爲めに捧ぐる君子の志にして是れ亦解信の一である、伯夷叔齊は周の武王が其君紂王を伐ちしを無道の行ひなりとして之を惡み、紂王亡びて天下の周に歸するに及び、無道の國の粟を食ふに忍びずとて首陽山に隠れて蕨を食ふて居つた、或人が蕨も亦周の國の物ならずといふたので、その蕨をも廢し遂に餓死して了ふた、再有が孔子に向つて伯夷叔齊は怨みたりやと問ひしに孔子は「仁を求めて仁を得たり又何をか怨みん」といはれた、伯夷叔齊は唯だ仁を求むるを以て終生の大目的となしたのであるから、功名富貴の如きは殆ど眼中に無いのである、故に一身をして飢渴の淵に沈むるとも、それで自分は立派に満足が出来ま



す、此等も皆な道理を信ずる所より得たる一大安心であります、我が禪門の上で申せば大梅法常禪師は馬祖大師に參じて「如何なるか是れ佛」と問はれしに、大師は「即心即佛」と答えられた、禪師は此即心即佛の四字に於て大安心を得られました、承陽大師は天童山に御修行の折如淨禪師が「參禪は身心脱落なり」と示されし時忽然として大悟せられ、身心脱落の四字を以て一生參學の事を了せられた、此等は解信の最高巔に達せられたものであります、次に信仰とは深く佛の大慈悲力を尊信して理屈も議論も打忘れ、妄念も迷執も打離れ、智恵利鈍の境界を超え貧富貴賤の差別を脱し、唯々有り難し忝なしとの信心のみとなりて徹底、佛に歸依し奉り此身心を佛に任せ奉り、ソコに大安心を決定するのであります、法然上人の一枚起請文に「もろこし我朝にもろくの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず、唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず」といひ「念佛を信ぜん人はたとひ一代の法を能く學すとも一文不知の愚鈍の身になりて尼入道の無智の輩に同じく智者の振舞をせ

ずして只一向に念佛すべし」云々とある、是れは極めて明瞭に信仰を説き示されたものである、此淨土門に對して曹洞宗即ち禪宗の信仰は全く異つたもの、様に思ふ人もあるが、それは甚しき誤解である、縦ひ禪宗たりと雖も彌々信仰の位地に進む時は、學解も見識も全く放下著で無ければならぬ、されば承陽大師は「佛法に證入すること必ずしも人天の世智をもて出世の舟航とするにはあらず、佛在世にも毛毬に依りて四果を證し、袈裟をかけて大道を明らめし、ともに愚暗のやから癡狂の畜類なり、たゞし正信のたすくるところまどひを離るゝみちあり、また癡老の比丘默坐せしを見て設齋の信女さとりを開きし、これ智によらず文によらず、言を待たず語を待たず但し是れ正信にたすけられたり」と仰せ下されてあります、此等の御文に依り仰信の深意を心得べきである。

## 二、二種の信仰の一致

かくの如く二通りの信仰がありますれど遂には一致に歸すべきものであります、抑も



佛様は何故に吾々が永久の御本尊として信仰し奉るべきかといふに、自づから三通りの理由があるからです、一に佛様は吾々の最大理想とすべき大功徳體で居らせらるゝからである、そも佛様は如何なる御境界であるかといふに智徳斷徳恩徳といふ三徳を最も圓滿に成就せられた御身である、智徳とは智慧の御徳である、吾々人間は智慧に於て大なる缺乏を感じて居る、生死の理も解らず自己の運命如何といふことも知らず、全く一寸先は黑暗の有様ぢや、縦ひ東西の學に通じ古今の理を究めたる智者學者たりと雖も、何に依て此世に生れて來たか、死して何れの處に至るべきや、明日は如何なる運命に接すべきや、如何にせば永久の幸福を獲得すべきや、これ等の問題に至ると、全く十分に安心の出來る様な解決はつけられぬ、或る程度までは想像も推考も及ぶであらうが、最後の斷案に逢着すると、唯だ「だらう」と「つまり」との二つに靠ける外は無、來年はキツと達者で居られますか、まあ達者で居る積りであります、明日の命は大丈夫でありますか、まあ大丈夫だらうと思ひますと申すより外は無、ぎりぎり決着の處に至ると全く御先眞暗です、それであるから生に迷ひ死に迷ひ運命に迷ひ永

遠の目的に迷ふて彌々病苦や苦死に襲はれますると、平日の學問も理窟も何の役にも立たず徒づらに周章狼狽してモガキ廻るに過ぎぬ、偶々立派な明めをつけた人があるにもせよ、唯だ消極的に満足するのみであつて、永遠の希望も無く前途の光明を認むるの力も無い、されば人間の智慧なるものも随分心細い様な感じがする、然るに佛様は宇宙の本源を究め生死の因由を覺り且つ萬法生起の因縁に於て通曉し玉はずといふところが無い、是れが佛の御智徳である、二に斷徳とは決斷の勇氣である、内外無量の惡魔を降伏したり、精神上の慾望を禁止したりするの勇氣である、娑婆往來八千返の難行苦行も亦勇氣である、未來際を期して一切衆生を濟度せんとするの大願行も亦勇氣である、換言すれば金剛の如き佛の大意志力を斷徳と申すのであります、三に恩徳とは大慈大悲の御徳である佛様は三界を以て悲願實行の領土と爲し、一切衆生を以て所化の赤子と思召してござるのである、一切衆生の中一箇半箇たりとも若し死生の苦輪を脱すること能はざるものがあれば、之を憐むこと慈母の病兒に於けるにも勝り、之を憂ふると三百の矛を以て心を刺すが如き思ひをなさるのである、是れ則ち



慈恩の大なるものであります、以上の三徳はツマリ智仁勇の三徳と同一であつて、人間の人間たる所以の道も皆な此三徳を以て根柢とせねばならぬ、今日の智育も徳育も精神の修養も信念の涵養も歸する所は此三徳の開發に外ならぬのであります、されば佛様の境界は、全く吾々人間の最高最大の理想體です、第二には佛様は吾々に必ず當に做ふべく學ぶべき千古不拔の模範であることは前の三徳に依て證せられます、それから第三には佛様は吾々に依り頼り奉るべき救済の主であらせられるからであります、佛は廣大なる誓願力に乗じて常恒無間に衆生を濟度して暫く休することはあらせられぬ、「曇りなき三世の佛の月影は心の水にすまぬ日ぞなき」で、千江水あり千江の月、佛の慈光は周遍法界ちや、此御慈悲を感得せざれば本當の信仰は顯はれぬ、又本當の信仰が起らねば此御慈悲の光りを感じすることは出来ぬものです、斯く三通りの理由に依りて佛様を御本尊として信仰歸依し奉るのであるから、此信仰の内には自づから高尚なる理想と高潔なる道徳とが備はつて居る、従つて迷信や妄信に陥る様な憂ひは無い筈であります、して見れば智仁勇の三徳を根據として宇宙の大法天地の公道を踏み

更に進んで、己れを忘れ我れを忘れて佛の大慈悲光明の中に此身心を投じて仰ぎ信するのであるから、信仰の中には自然と解信が備はつて居ります、又單に道理を信するといふても、その道理なるものが決して空論や理窟では信仰にはならぬ、信仰といふ時には道といふも法といふも既に一の佛體と化し靈體と化して居るのであります、なぜなれば道といひ法といふ皆な是れ宇宙の妙法にして畢竟人々に具足する佛性の妙徳であるから、此道を信するのは取りも直さず自己の佛性を信するのである、此法を信するのには宇宙の本佛を信するのである、されば解信の中より自づと信仰が現はれて來ねばならぬ、是に於てか完全なる解信は眞正なる信仰と一致するを知らねばなりませぬ、故に解より入つても信仰より入つても、信仰の妙處に至つては、最早説明杯の及ぶものでは無い、古人は、眞の發菩提心といふは、或は佛様の御姿を拜した時、或は一句半偈の法を聽聞した時に、親にでも逢ふた様な心持がして思はずも嬉し涙を流し海上に漂へる者が救助船に救ひ上げられた時の様な心地がして覺えず總身に汗を流す程に深く感ずるものである、此覺えず嬉し涙をこぼしたり有り難さが骨身に泌み込



む程に感ずる時忽然として心の奥深き處に有する眞の性が現はれるものです、此性一たび現はるれば一切の苦惱も束縛も自然に解脱して、非常なる大安心を得、其結果は他の人々にまでも偉大なる感化を與ふるの力があるものである、そは信仰は全く精神の奥底より湧き出づる眞情の泉であるからでございます。

### 三、麗はしき實例

こゝに最も感心すべき麗はしき安心談がある、そは東京市赤坂區青山南町五ノ三三に住居せらるゝ永松爲治郎氏の三男三郎と稱する十二歳の豁達明敏なる少年が明治四十五年四月十一日頃より病に罹り藥石其効なく遂に二十七日を以て歸らぬ旅に赴いたが二句に足ぬ間重き病の褥に臥したる三郎の覺悟と態度とは殆ど信仰の精を得、安心の堂に昇りたらんかとも思はるゝ程立派なものであつたのである、三郎は明治三十四年四月九日其父爲次郎氏が伊勢山田專賣支局長勤務中同處に於て誕生した、其父爲治郎氏は温厚篤實の君子であるが其母菊子も淑徳の賢夫人であつて、三郎を懷妊中は朝夕

外宮に參拜するを樂みとし殆ど日課の如く勤められたそうぢや、明治三十七年父は大藏省專賣局詰を命ぜられて住居を東京に定むるとなつた、三郎は七歳にして幼稚園に入り八歳の春青南小學校に入學した、それより在學四箇年間の成績はイツも學力操行共に優等にして體格も標準以上の體力を有し毎學年其級の模範兒童として數次褒賞を受け常に級長又は副級長の職に在りて全級生徒より多大の信望を博して居つたのである、且つ彼は小供に似氣なく頗る遠大の志を抱き他日工學を專攻して世界に有益なる機械を發明し以て國家に貢獻せんとを期して居つたそうである、彼が友情に厚かりしとは尋常人の企て及ぶ所では無かつた、其一例を舉ぐれば、彼は常に木綿の兵児帶の端を裂き其狀恰かも紙製の塵拂の如くになつて居た、三四ヶ月を経る内に帶が短かくなつて締められぬ様になつても彼は少しも其不便を訴へるとが無かつた、母は之を見て御前は何故に帶を彼の様に引ちぎるのであるぞと尋ねしに、彼は「僕御友達や他級生に下駄や草履の緒を切らして居る者があると此兵児帶を裂て鼻緒をすげてやるよ然うすると皆が大變に喜ぶよ」と申した、母は是を聽て却つて大いに喜び其後



は古手拭ひを持たして其志を繼續せしめたそうである、又彼は道德修養の點に於て自發的に最も綿密なる注意を拂ふて居た、彼が忘れ形見とも謂ふべき一冊の手帖がある、其手帖には最初に皇室と皇族方の系譜を記し其次には古今東西に於ける聖人君子偉人大家の格言二百五十九章を寫し、其次には「よい日本」といふ標題の下に「一、國のため忠義」と書き傍らに「天皇陛下」と記し、其下に能久親王、靖國神社、谷村計介、皇室を尊べ、國旗祝日大祭日」と六行に書き列ねてある、是は彼が崇敬せる人物と尊重すべき事柄とを記したものであらう、其次に「二、他人のため、三、家庭、四、自分」として、下に實踐の徳目と標準となすべき人物の名を記してある、此等の遺物に依るも彼が平素の心懸けが如何に立派であつたか察せられる、斯く心操の麗はしきと花の如く行狀の清らかなること玉の如き有爲有望の少年は不幸にして執拗なる病魔の侵す所となりしこそ重ねくも遺憾なれ、彼は明治四十五年の四月十一日頃より病に罹り小澤醫師と安倍醫學士との診療を受くるととなつた、格別の大事には至らざるべしと思ひの外、廿三日に至りて病勢漸く昂進し佐々木博士と兩主任醫の診断に依り

始めて心臓内膜炎と稱する怖ろしき病なることを知りて兩親の驚きは果して如何許りにありしならん、彼は病勢の猛烈なるより自から其頼り少きを感じしものか廿四日には彼は豫め覺悟する所があつたと見え友達より借りたる書物の返濟方を托し且つ其兄に向ひ「僕が購讀して居る『少年』(雜誌)は最早不用ですから來月分からは送らぬやうに斷はつて下さい」と申したそうぢや、此日の午後彼は母に向ひ「かあさん僕の病氣は重患なそうですぬ——」と言ひければ母は病人の氣分を弱らせてはと思ひ態と素知らぬ振にて「三郎さん重患とは何の事です、昨日は佐々木博士が見え今日は入澤博士が見えて御療治下さるから屹度全快しますよ夫故心を静め氣を確かに持つて下さい」と勵まされた、其後彼はまたもや母に向ひ「かあさん僕は今日迄人さんに迷惑を掛けた事も無ければ何一ッ人さんの物を取つた事もありませんから決して心配して下さるな」と申した、是れは母親が常々子供に教訓して「人間は如何に學問が出来てもお金があつても又智慧が優れても身體が達者でも、若しも品性が下劣であつて、假にも他人の持つて居る物を欲しがつたり又人さんの物に塵一本たりとも手を觸る様な卑しい根



性があつては人間に生れた甲斐がない」と折に觸れては言聞かされた、彼は小さな腦裡に母の教訓をば深く刻み込めて病の床に臥乍らも母に安心を與へんとの優しき心より故らに斯る事を申したものであらう、此語を聞きし時の母親の心持は何んなでありましたらう、此日の夜に入りてより彼は如何に感ぜしものなるや、病苦に惱む時は低聲に南無阿彌陀佛くと念佛を唱へ始めた、不思議や念佛を唱ふると聊か苦痛が輕くなると申したそうです嗚呼三郎はイツの間に斯かる信念を植え置きしぞ、父親は多忙の身とて固より信念は深き方にてありしも彼を連て法義を寺院に聞く杯の餘裕を存せず、母は多くの小供を養育するのみか乳呑兒をすらかへし身であれば中々に佛法を聽聞するの暇などは得られぬ、殊更東京生活の常として十人の八九迄は法義を聞くの機會に接することが出來ぬ、よしや聞法の縁に觸れたる事があればとて三郎位の年齢では容易に信仰を發する迄にはゆかぬものです、縦ひ信仰を發せしとするも非常なる病苦に襲はれし場合杯に自發的に念佛を唱ふる杯とは全く稀有の事と申さねばならぬ、然るに三郎は獨りして靜かに念佛を唱へ此力に依て自ら病苦を忍びしといふは、正し

く夙世以來法縁の深厚なるに依るものと想像せられ一層感歎の涙に咽ぶのであります。

四、まごゝろ

心臟内膜炎といへる病は最も激烈なる苦痛を感ずるものと聞けば、三郎の難儀はさこそと察せられて不便いやます許りである、然るに彼は頻りに念佛を唱へそれに依て苦痛を凌ぎ更に苦しいと言ふとを口に漏さんださうです、されど發言には如何に困難なりしか彼は符號を定めて母に示した、乃ち指一本を出したならば氷、二本は氷にて冷却したる茶、三本は吐唾器、四本の時は唇を拭ふ小町紙といふのであつた、彼が最も秩序正しき頭腦を有つて居りしことは此一事にても察せられて轉た彼が早世を惜むのであります、二十五日には病人の容態險惡なるを以て兄と姉と妹とに學校を休ませたるに、彼は之を氣支ひ母に向つて何故休みましたかと問ふたさうです、又彼は平素寫眞機を欲がつて居りしゆえ彼の心を慰めんとて兩三日前に手札形の寫眞機を買ふて遣りしに此日彼は母に向ひて「母さん此寫眞機とスカート飛行機は僕が持つて行くよ」



といふた、母は「三郎さん何處へ持つて行くの」と尋ねしに、只「呔う」と言ふたのみで稍やあつて「此飛行機で吃驚させるよ」と申したそうです、此語を味ふて見ると何にやら奥深き意味がありそうに思はれる、此日の夕刻彼は母に向ひ「お父さんとお母さんと兄さんと姉さんと大きな聲で御念佛を唱へてよ」と請ふた、一同は恰も食事中であつたが之を中止して三郎の枕邊に聚まり「南無阿彌陀佛」と繰返し／＼唱へた、すると彼は「あゝ宜い氣持になつた有り難う僕はお父さんとお母さんとお兄さんの御恩は決して忘れは致しませぬからね——」といふたが此一語の内には確かに告別の意味がある、猶彼は妹信子の手を握りて信子さん「僕が死んだら菅沼先生（第五學年の擔任教師）に知らせてね、朝と晩に彼の鐘（佛前にあ）をか／＼と叩いてお呉れよ僕は宜い氣持だからといふと、信子は「兄さんが死だら何しよう」といふて大聲揚げて泣き乍ら次の室に走り込んだそうぢや、此等を見ても三郎の信仰は殆んど自發的であつて其の信仰の中には無限の歡喜心が迸つて居る、後にて母が「三郎さんお前が先程あんな事を言ふたから信子が泣きましたよ可愛相にね——三郎さん決して死ぬる事はあ

りませんよ」と言ふと彼は「呔うあれは信子を威かしたのだよ」と笑顔を作りて母を慰めたそうです、如何にせん彼は連日連夜病苦の爲めに一睡もせず且つ四五時間毎に注射を施す爲め疲勞は刻々に加はつて來た、彼は母に向ひ頻りに「母さん拜んでよ」と申すから二口三口念佛を唱へたが彼は首を左右に振る様でありければ母は更に其聲を細く長く唱へしに左も嬉しげなる面持をなしたそうです、此日母が「三郎さんお前は善い兒だよどうしてそんなに利口だらう——ね早く快くなつてお呉れよ」と言ひけるに、彼は何も答へず暫くして「お母さん僕がね——好いものを持って來て上げるから待つてお出でよ」といふた、二十六日になると病人の衰弱加はりしが、彼は苦しき息の中から時々念佛を唱へ、更に母に向ひて「お母さん一は忠、二は他人、三は家庭、四は自分ですよ忘れてはいけませぬよ」と申せしとぞ、三郎が餘りに念佛を唱ふるので父親は大本山總持寺より戴きたる珠數を與へけるに、彼はさも嬉し氣に幾度も推戴さ「お父さん眞實に僕に下さるの」と尋ね「本當に上げるよ」といふを聞て何遍も「有り難う」といひて、それより其珠數を左の手に箝め念佛を唱ふる毎に兩手に掛



けりりとぞ、此日父母は三郎に向ひ「三郎さんお父さんもお母さんもお前と一緒に  
つて上げたいけれど大勢小供があるから未だ三十年や四十年は行かれぬ故三郎さんは  
一人で行くのだよ」と云へしに彼は「呟う」と心持よき返辭をなし、父は念の爲め更に  
「今お父さんの言ふた事が解りましたか」と問ひたるに彼は「よく解りました」と答  
へた、此日病人は強て衣服を取替へアルコールを以て全身を清潔に拭はしめて「嗚呼  
宜い氣持になつた」といふて大そう喜んだそうである、此夜三時頃非常に苦痛を感ぜ  
し様でありしが暫くして「痛ければ治してやるから此方へ来いー此方へ来いー」  
とさも遠方にて呼ぶが如き聲を出し良あつて恰も夢より覺めたる如く「ア、宜い氣持  
だ」と申したそうです、此等は正しく三郎の正信心が佛陀の靈光を感得したものと見  
るとが出来る、此夜彼は小澤醫師に向ひ「先牛拜んでよ——」と繰返して頼んだ、小澤  
醫師も拒むに由なく涕を流しつゝ念佛を唱へられた、廿七日の朝大阪の祖母が來ると  
になつてゐたので、母は彼に向つて「三郎さん祖母さんが御出になつたら快くなつて  
下さいよ」といふと、彼は「祖母さんが來たら一度は苦しくなつて其れからは宜い氣

持になるよ」と答えた、母は更に「さう言はずと全然快くなつて下さいよ」といふと  
「だつて僕は——脈が無いもの」と答へた、ソコで母が病人の手を取りて脈を驗み  
たるに早や脈は絶えて居つた、が態と「三郎さん脈は有るではありませんか」といひ  
たるに彼は自ら左右の手を驗みて「だつて脈は無いもの虚言を吐くのは嫌ひ」と申し  
た、良ありて大阪の祖母が病室に入りて語を懸けたるが彼は最早視力が衰へて「もう  
目が見えぬ」といひつゝ目をみはり左も嬉しそうちに「お祖母さん有りがたう能く來て  
ね」といふて満足の體であつた、彼は祖母の持ち來りし神酒を喜んで吸ひ、左腕に簪  
めたる珠數を外して祖母に渡し「祖母さんは是れで拜んでよ」といふた、祖母を始め一  
同が悲歎の涙に咽び乍ら念佛を唱へて後、珠數を彼に返したるが最早自分で飲めると  
が出来ず母に飲て貰ひ口の中に念佛を唱へつゝ徐に父の頸に右の手を掛け乍ら苦悶の  
状も無く遂に永き眠りに就いたのである、時に午前十時七分であつた、落命の後遺骸  
を改めたるに一滴の不淨物だも漏出せざりしといふ、彼が如何に信仰に依りて安靜を  
得たかを證せられて唯感歎の外はありませぬ、此三郎が最後の態度に依りて兩親や兄



弟は言ふに及ばず、お醫者さんから看護婦迄が偉大なる感化を受けたのであります、此御話は父永松爲治郎氏が涙ながらに書かれたる「まごゝろ」と題する書物の中の「愛兒三郎病臥二旬の記」の中に一通り記されてある。

### 五、信仰は道德の母

前に述たる三郎臨終際の御話しに依りて、迂納は二つの大なる教訓に預かりしと感ずるのである、其一は夙縁の力の必ず實在する事です、三郎が纔十二歳の少年にして斯く迄の信仰を有せしとは到底人力の及ぶ所では無い、身重病の侵す所となりて骨を碎かれ肉を裂かるゝの苦痛を感じ殊に必死の状態に在る可憐なる一少年がいかに佛教に對する素養あればとて自發的に念佛を唱へ然も心の奥底より信念を發起するなどいふとは容易にあるべき筈のものでは無い、然に三郎は念佛を唱へ信仰を喜び而して其様は恰も幾十年の信仰的修養を積みたるものにもまして堅固不動なるが如きは、全く夙世に殖え置きたる佛縁の發生したるものと見るの外は無い、古の高僧や偉人の傳を

見るに襦袢の内在り乍ら殆ど他の教に依らずして掌を合せて佛を拜みあるは口には南無々々と唱へられたとが澤山ありますが、此等の事蹟には單に遺傳とか感化とかいふ理由のみを以て解釋し盡すことが出来ぬ場合が多い、三世因果善惡業報の理を究むれば、自づから夙世の因縁力の存することが信ぜられるから、人生の所有出來事に於て更に疑ふ所が無いのです、二には信念の力は精神と肉體との兩方面に大なる安穩と快樂とを與ふることであり、三郎は最も苦痛の激烈なるべき病に罹つたのである、然るに彼は能く其苦痛を忍びて更に之を訴ふることも無く、激痛を感じるに當りては一層心を籠めて念佛を唱へ、其精神は益々健全にして却て精神上の美德を遺憾なく現はして居る、想ふに彼は何物かを將來に認めて苦痛の中にも一種の快樂を感じて居たのである、息も絶えなん許りに心臓の鼓動烈しき折、切れくにも唇頭より漏るゝ談片が、如何にも同情に富み如何にも信仰の豊なることが察せられます、或は彼は最も崇高なる佛の靈體を認めて是を永遠不滅の歸依處と爲し其處に絶對の大信念を托したるものであるかも知れぬ、果して然らば三郎は年齒甚だ短しと雖も金剛堅固の願力は千



生萬生の後に至る迄必ずや佛菩薩の行願を不退轉に營むものであらう、嗚呼三郎は決して死には致しませぬ是より益々未來永久に活動して止まぬものである而して其佛行菩薩行とは自覺々他の行である、何を覺するやといふに本具佛性の智徳を開發するのである、乃ち前に述べたる佛の三大徳を圓滿することであり、此圓滿を永遠に期するのであります、世の所謂幸福とか快樂とかいふものは畢竟此三大徳の根幹により發する所の花實である、思ふに人生百に滿たず人事多くは夢の如し、徒らに白駒の隙を過ぐるが如き幻の世に處して、唯だ功名利達にのみ汲々として一生を貪瞋痴三毒の使役に供するが如きは、實に憐れむべき生涯と申さねばなりませぬ、如何なる愚夫愚婦たりとも若し健全なる信仰の力があれば、獨り生死岸頭に立て大安心を決定し得るのみならず、平生の順境逆境に在りても自づから逍遙として道に合する底の境界を獲ることが出来るものです、此信仰があつてこそ盡未來際の大理想も現はれて、始めて人生に於ける意義も明らかになつて來るのであります或人は宗教の要素としては第一には超人格的勢力に對する信仰第二には希望であると説き、其希望の種類を其身の

健康を祈ること、財産の増殖を願ふことと戀愛に對する祈願との三つを擧げてあつた、世の淺薄なる信者の思想を分析したならば儘に此の三種の希望の中の一に依りて信仰する者であるには相違ないが、深遠なる信仰に至つては決して此等の希望に滯るものではない否、此等の希望を超越したる最高最大の希望を以て基礎とせねばならぬ、基督教等に於て神を信ずるのは神の救濟を祈りて神の御傍に至ることが目的となつて居るが、佛教に於て佛を信ずるのは自身が佛徳を備へ佛力を發するにあるのである、佛の徳は衆生利益に依りて現はれ、佛の力は煩惱を斷じ菩提を證するに依つて現はる、換言すれば智徳圓滿を期するのが佛教の目的であります、故に解信を得て更に仰信に上るに非ざれば眞の信仰は現前せぬ、左すれば眞の信仰を得るには、第一には自己元來諸佛同體の性徳あることを信じ、二には今日の此身には煩惱罪惡の穢あることを慚愧し、三には佛陀の大慈悲力を信じ、四には今より大誓願を發し未來際を盡して佛徳を修養し發揮せんことを期すべきである、是の如きの信仰を得たならば始めて精神の基礎が確まりて最も圓滿なる道徳を養ひ得べきものである、然らば信仰と道徳とは決



して衝突すべき譯は無いのみならず、寧ろ真正なる道徳は健全なる信仰によりて始めて完全ならしむべきものと思ひます、苟も佛教を信ずる人は能々此等の關係を心得て貫ひたいものであります、華嚴經に「信は道の元、功德の母と爲す」とある聖訓は實に萬世不易の至言であることを味ふべきである。

## 第四講 安心禪話

### 一、人生と安心

佛教の目的の第一は、安心決定にある、信仰の効驗は先づ以て安心を得るとに依て現れる、安心の無き宗教は宗教の價値ありと謂ふべからず、故に如何なる宗教にも安心の法は備はつて居る、况や我が佛教に於ては縦ひ宗派教へを殊にすと雖も安心の一段に至つては總て佛陀の大菩提と大慈悲とを基礎とせざるは無いのである、抑も安心とは煩悶の反對です、人生煩悶多し人事概ね不如意である、是に於てか種々様々の苦患が其身を襲ひ其心を攪亂し、全生涯を煩悶の窠窟に投ずる者が多いのである、縦や苦痛煩悶の輕微なる人と雖も、一生の終焉期に達すれば、彼の蓮如上人が「夫人間の浮生なる相をつらく、觀するに凡そはかなきものは此世の始中終、幻の如くなる一期なり、されば未だ萬歳の人身をうけたりといふ事を聞かず、一生過ぎ易し今に至りて誰



か百年の形體を保つべきや、我やささ人やささ今日とも知らず明日とも知らず後れ先だつ人は、幹のしづく梢の露よりもしげしといへり、されば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり、既に無常の風來りぬれば即ち兩の眼忽ち杜ち一の息永く絶ぬれば、紅顔空しく變じて桃李の粧を失ひぬる時は六親眷屬集りて歎き悲しめども更に其甲斐あるべからず、云云とある通りぢや、これが人生の事實にして何人でも一度は此事實に遭遇しない譯には行かぬ、人間の煩悶を大別すると自發的と外襲的との二つとなる、自發的とは自分の心柄で煩悶するとは是等は平地に骨堆を生ずる様なもので全く手製の苦しみです、外襲的とは自然と人事との別がある、自然といふは火難水難風難震災等の災厄です、人事といふは境遇や事情に依て外から我身を襲ひ來るもので親子とか夫婦とか朋友とかいふ關係の上から來たる苦痛もあり、又社會の出來事とか國家の不幸とか或は盜難とか罵詈擲の難とかいふ類であります、四苦八苦の中にて病苦と死苦との切なきことは勿論ぢやが、怨憎會苦と哀別離苦とが尤も煩悶を感じる事が深い、怨憎會苦とは怨讎に廻り會ふとてす、或は子の爲に苦しめられたり或は

夫の爲に惱まされたり、朋友親族の爲に耐られぬ迷惑を懸られたり、その他種々の事情に攻られて非常なる苦痛を感じる様なものが澤山あるものです、次に哀別離苦といふは可愛者に別れる苦みで、此苦みは前の怨憎會苦にも増程の煩悶を惹起すとのあるものです、幼にして父母に死別をしたり、若ふして夫に別れ或は妻に別れ、年老て愛子に別れたり愛孫に別れたりした人の心の中の悲しさ苦しさは果してどんなであらう此等の苦痛よりして益々煩悶を重ね、遂に愚癡に囚はれたり迷信に陥つたり、一生涯を通じて丸で煩悶惱亂の窠中に埋没されて了ふものもるのであります、而して此等の苦痛は十人が十人も殆ど免がれ難いものです、此意味から見れば吾々御互は丁度苦んだり悶へたり泣いたり恨んだりする爲に生れて來たかと思はるゝ程である故に古歌にも「世の中は貧ぢや有徳ぢや苦ぢや樂ぢやなんぢやかんぢやで末は無茶苦茶」思ふこと一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世や」など、詠である西行法師も「心から心に物を思はせて身を苦しむる我身なりけり」と歎かれてある、我國の社會現象の上から見ても自殺者の數が年々増加率を示して居るが、其原因は言ふ迄も無く煩悶の



結果である、其の一端を表示すると

	男	女
明治廿五年	四千五百八十七人	二千八百〇二人
同 二十八年	四千四百四十九人	二千八百十二人
同 三十四年	五千二百二十七人	三千三百五十五人
同 三十七年	六千二百四十五人	三千九百〇四人
同 四十年	五千四百六十八人	三千七百七十二人
大正元年	六千八百十二人	三千九百七十二人

となるそうぢや、而して其原因を分類したものと見ると。

精神錯亂の爲め 三千三百五十八人  
 疾病を苦にせるもの 二千二百〇四人  
 生計の困難に出るもの 八百三十七人  
 男女の痴情に出るもの 六百四十四人

後悔の結果に出づるもの

百七十三人

未來を憂慮するものより出る者

四百三十二人

となるそうぢや、其動機には種々の差別はあるが、總て煩悶の結果ならざるは無い、自殺者の如きは我國の全人口の上から見れば固より一小部分に過ぎざれど煩悶苦悶の上からいへば精神的自殺者の數はどの位あるか知れぬ、要するに文明が進み社會の事情が複雑になる程煩悶者は増加するものである故に、精神の修養なるものは文明人程寧ろ其必要を感じる事が痛切です、畢竟するに修養其者も亦文明の一大要素であることを知らねばならぬ。

二、消極的安心

前に述べたる如き、人生の所有煩悶を解脱して、健全なる精神を養ひ、動中に静を得、苦中に樂を占め、娑婆即寂光淨土たるの大利を獲得し以て現身に於て佛陀最勝の徳を修むるのが安心であります、然るに此安心に消極的安心と積極的安心と信仰的安心と



の三種がある、消極的安心とは諦らめの好いとである、諦めの好いのは因縁觀若しくは天命觀に基かねばならぬ、此安心を得んには先づ貪慾の方面から諦めてかゝるが宜い、財を望み色を貪ぼり名を求め長命を希がひ快樂を欲するは人間の常情であらうが、人各々定まれる分ありて決して思ふ様にはゆかぬ、死生命あり富貴天に在り、貧賤に處して勞苦に従ふも皆夙世の因縁である、怨讎に廻り會ふも可愛い人に別るゝのも皆定まれる約束である、此事は唯だ諦める爲の方便説ては無い、萬古不易の大法です、故に因果經には「前世の因を知らんと欲せば即ち今世に受くる所の者是なり、後世の果を知らんと欲せば則ち今生に爲す所の者是なり」とある、又古人の語(廿三問答)にも「此世に命永く人に用ゐられて萬乏しからぬ果報は過し世に物の命を殺さず人を輕しめず物を施し柔和なりし因縁なり、喩へば春よき種をこしらへて能く生ひたつやうに土を振り種をまく因あれば秋は其實よくいでる果あるが如し、春は過去秋は現在の如し」とも「此世に萬心に叶はず貧しく賤しく病のあるは前の世の報なりと信じて、明年の種をこしらへ能く土をこしらへて種をふるせば必ず秋よきが如し」ともある、此

因縁觀が練熟しますれば、苦みのあるにつけ困難のあるにつけ天をも恨みず人をも怨みず、益々其己れを責め其身を警めて、將來を慎しみ行持を正ふし以て今後の向上發展を期する様になるものです、而して此因縁觀に依りて自ら其分限に安んじ能く足ることを知るに依つて不自由も不自由と思はず困難も困難と思はぬから自然に安心が決定されて世の苦痛と煩悶とを免かるゝことが出来る者です、明治六年の頃宮城縣令たりし宮城時亮氏の實母芳子は信心深き人であつたそうなが、或時盜賊が忍び入り衣類其他にて三千餘圓の品物を盗み去りしが、芳子は更に驚ける色もなく見舞の人々に向ふてかねて有爲轉變の世とは聞つれど今迄は左程にも感ぜざりしが、今こそは平素の御法義思ひ當りて最と有り難く覺えたり、是れ全く前生に於て妾が人より衣服調度を借りて返さざりしを此度返却せしものならん、若し日頃聞法の縁なかりせば斯る場合に定めて周章もすべく愚痴も起り申すべきに、因果應報の理を知り得し身とて、愚かならも斷念のつきしは偏へに御教の思なり」といふて喜ばれました、其後時亮氏が銀行の爲めに莫大の損毛をせられし時も、老母は立派に諦めて「當にならぬ物を當にす



るのが凡夫の迷ひぢや、此世の中で眞實當になる物は御信心の外は無ない」といはれた  
 そうである、又彼の支那三國時代の賢者司馬徴の如ごときも矢張一種の天命觀を有して居  
 た者と見え何事に對しても好々といふのが御得意であつた依て世人は稱して好々先生  
 といふたとある、雨降つても好々、天氣が晴れても好々、損をしても好々、利を得て  
 も好々、或時隣家の婦女が愛兒を失ふたとて泣顔をして告げに來た、先生例に依つて  
 好々といふた、其妻は氣の毒に思ひ、隣人其不幸を訴ふるに好々といはるゝは其意を  
 得ずと責ければ、先生笑つて汝の言も亦好々といふたとある、併し此等は決して模範  
 にはならぬ、佛教的安心は假たとひ諦めが宜よくにしても因縁因果といふ一大原理の下に諦め  
 るのであるから、悲しむべきには悲み弔ふべきには弔して決して常識を逸したり人情  
 に反そむいたりはせぬ、常識と人情とを有し乍ら而も立派に諦めて行くのである、吾々は  
 先此消極的安心を習はねばなりません。

### 三、積極的安心

しかし消極的安心は極めて單純なる諦め方であるから、其人の精神の奥底にはまた十  
 分の威力が備はつて居らぬ、従つて活動的進歩的向外的で無い、故に更に積極的安心  
 に進まねばなりません、積極的安心といふは外に活動の靈機を發轉し内不動の安心に  
 止住するのである、此安心を得るには願力と定力との二つを修得せねばならぬ、願力  
 とは誓願である、乃ち前途に大目的を立つることぢや、吾人の目的は之を大別すると  
 二に歸す一は道を求むること一は他を利すること、此二大目的を立つるのが眞の發善  
 提心といふのである、吾々は先づ第一に道を求むるの志操が堅實で無ければならぬ、  
 「はり傳ふ鼠の道も道なれど誠の道は人の行く道」人の行く道とは何ぞ「忠孝の道よ  
 り外に道ぞなき佛の道もこれよりぞ入る」といふ歌もあつて、道なるものは決して此  
 世と懸け離れたものではない、併し道の本體はどんなものかといふと是れは中々の大  
 問題ぢやが、我が佛教に於てはその標準として佛様を指し示すに依て實に適切です、  
 佛の智慧、佛の道徳、佛の慈悲これが道の全體大用である、吾々は佛の智慧を學んで  
 轉迷開悟し、佛の道徳に做ならば惡を止め善を行ひ、佛の慈悲を信じて苦みを離れて樂



みを得るのである、是れが求道の親しきものぢや、これ他を利するといふは人類は言ふに及ばず天地の間に生とし生ける物を普く濟ひ助けんと志を立つるのである、此二つを以て盡未來際の目的とするのが眞の願力といふのぢや、次に定力とは禪定の力である、乃ち坐禪に依りて腹の内の妄想を断ち切りて己れの精神を大盤石の様に落着けることが必要です、兎角凡夫の心は動き易いから困る、先帝陛下は「ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ教へ難きは人の道なり」とも、「ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵をいかで拂はん」とも御製あらせ給ふてある、ソコで禪定の第一歩としては精神の動亂を防ぎて一定不動の地に安住せしむるのである、心を落着けるには、外物の刺撃に耐へる力と精神を統一する力とを養ふことが肝要ぢや、絶へず訓練を積む時は誰れにでも此力を得ることが出来る、始めて大砲の音を傍で聞くと喫驚するが慣れると平氣になるものです、是れその刺撃に耐へる力の現はれたのである、又普通は表に出るにも恐れる様な氣の弱い者が、一生懸命の場合になると夜道でも何とも思はず獨りで飛び歩くものです、是は精神の統一より出でたる力である、故に遺教經には「心

を一處に制すれば事として辨ぜずといふと無し」とも仰せられてある、是の如く修養すればそれが段々習慣性となつて益々精神が落着て、如何なる逆境に立ても驚かぬ様になります、加之斯る安心を得た者は前に申した願力に依りて益々活動して止まず而してその活動の中に在りて泰然不動山の如き心を持つのである、彼の孟子に「富貴も淫すること能はず貧賤も移すこと能はず威武も屈すること能はず此れ之を大丈夫と謂ふ」とあるのも此安心を得たのである、又有名なる快川和尚は美濃の崇福寺に住せしが、後に武田信玄公が慧林寺を甲府に建て、開山に請した、正親町天皇は特に大通智勝國師の號を賜ふた、天正十年の春武田家は織田信長の爲めに滅ぼされた、信長公は和尚の道風を喜びて之を招きたるも應ぜず、加之公の意に忤ふことありしを以て、公は大に怒り四月三日武夫數百人を遣はし山中の衆を驅りて三門に趁ひ上げ門下に薪を積みて四方より火を放ち、士卒は戟を執て之を圍むこと嚴なり、隨徒一百餘人皆威儀を整へて焰烟の中に坐す、和尚即ち垂語して曰く「諸人即今大火焰裏に向つて如何が大法輪を轉じ去らん」と衆皆な下語す、最後に和尚はスツクと立上り乃ち曰く「安禪不三



必須ニ山水滅ニ却心頭一火自涼」と、猛火衣に著くも恬然として動かず、笑を  
 含んで大衆と共に火中に坐化せられた、吾々とても願力を養なはゞ快川和尚に劣らぬ  
 安心も得らるゝであらう、「坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て」こ  
 ういふ安心を得る時は、此人生の眞只中に在りて各々其本分を盡し天職に勵み乍ら、脱  
 然として大解脱の境界に安住することが出来る、是を木人方に歌ひ石女立て舞ふとも  
 申すのであります。

#### 四、理想的安心

積極的安心は、所謂解脱的安心であるから、吾々は修養上最高の標的ではあるが、單  
 に解脱を以て能事畢れりとは申されぬ、承陽大師は學道用心集に「操行と道と符合せ  
 ざれば身心未だ安寧ならず、身心安寧ならざれば身心安樂ならず」と仰せられたが、  
 安心にも自から安寧と安樂との差がある、安寧といふは精神が調ふて些子の不平も煩  
 悶も無くなつた平和の状態です、即ち解脱的安心であります、だが解脱の徳のみでは

冷靜一偏となつて動もすれば百尺竿頭の死漢となる恐れがある、故に更に一步を進め  
 て信仰的安心に入らねばならぬ、信仰的安心とは自心是れ佛なることを信じて大知見  
 を發し、前佛の願行に倣ひ前佛の慈念に歸依して大歡喜を生じ來るのである、自己是  
 れ佛なるが故に佛も亦是れ自己なりと信ずる時は、佛と我と寸毫の隔て無くして自づ  
 から感應道交するのである、承陽大師は此時の状態を御示し下されて「厭ふこと無く  
 慕ふこと無き此時始めて佛の心に入る但し心をして圖ること莫れ言をもて云ふこと莫  
 れ、唯我身をも心をも放ち忘れて佛の家に投げ入れて佛の方より行はれて之に従がひ  
 もてゆく時、力をも入れず心をも費さずして生死を離れ佛となる、誰の人が心に滯ほ  
 るべき」と生死の卷に仰せられた、吾々は元來佛と二面なき本性本徳を有して居る  
 といふことを確信すれば、釋尊も彌陀如來も其他三世の諸佛も皆な自己の光明にして  
 決して自己以外のものでは無いといふことか解る、さあ是れが信仰の基礎です、吾は  
 佛なりと確信すれば、なにしに淺ましき凡夫根性が起されませう、どうしてつまらぬ  
 我執我慢などに囚はれませう、偶々妄想が起つても嗚呼耻かしやといふ念を發して知



らず、懺悔心が現はれるものです。此時こそは、佛の御誓願も自分の爲めの御誓願の如くに思はれ、佛の御化導も自分一人の爲めに御化導の如くに思はれて、我を忘れて佛の大慈悲光明の中に此の身を投ずる様になり、言ふに言はれぬ嬉しさと樂しさとが湧き出すものです。是れが佛の心に入つたのである。既に佛の心に入りぬれば十二時中寝るも起るも佛の心を離れぬ様になる、故に佛の御照覽を畏こみてその心を清淨にし、佛の御冥加を喜びて無限の樂しみを感ずるに依て、身心が自から安樂になります、凡そ樂みは信念の所發であるから道を信ずると深かければその樂しみも亦深きものである、孔子が「疏食を食ひ水を飲み脰を曲げて之を杖にす樂み亦其中に在り」といひ、又その高弟顔回を品評して「賢なる哉回也一簞の食一瓢の飲陋巷に在り人其の憂へに堪へず回也其樂しみを改めず賢なる哉回也」といはれた、孔子も顔回も皆道を信ずること深きに依て無限の樂しみを得られたのである、又孔子が途中樹下に雨宿りして弟子と共に讀書して居られた時、桓魋なる者が後より木を伐り取りて孔子を害せんとした、子路が怒つて彼と戦はんとせしに、孔子は泰然自若として、「天、徳を予に

生ず桓魋其れ予を如何ん」乃ち我は天より徳を受けて天を助けあるものなれば桓魋の如き者がどうしやうぞ、天が後ろ援に成て居るから畏るゝに足らぬといはれました、是れは信力の所發であります、况や我が佛教に於ける信仰心は宇宙に充滿する佛の大光明を認めてゆくのであるから、草木國土一として此大光明に漏るゝ物なし、起居動靜時として此大光明に照されざるは無い朝々佛を抱いて起き夜々佛を抱いて眠る、「散ればさささけばまた散る春毎の花の姿は如來常住」何れの處にか佛ならざる物やあるべき「花は花紅葉は紅葉そのまゝにいはで教ふる法の花山」何れの時か妙法ならざる境やあるべき、彼の蘇東坡が「溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、佗日如何舉似人」と詠ぜし如き、眞に能く正信心を開發して徧法界の佛光明に接觸せば、溪川の潺々たる響も妙法の聲、山岳の崢嶸たる姿も法身の體、乃ち「峯の色谷の響もみな、がら釋迦尼牟佛の聲と姿と」ぢや又彼の無門和尚が「春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、若無閑事掛心頭、便是人間好時節」て、春夏秋冬四季折々の眺めも盡く宇宙の實相を顯現して眞理の光明は天地に輝き渡つて



居る「春は花夏杜鵑秋は月冬雪さえて涼しかりけり」此間に無限の樂みを享有することが出来るから百姓をし乍らも商法を營み乍らも此樂みは盡くることが無い、故に自づと煩悶を免がれ邪見妄想に遠ざかり、歩々盡く天地の大道を横行闊歩して行くことが出来る。

### 五、佛教の目的

古語に、「君子は心を治めて境を治めず小人は境を治めて心を治めず」といふてある、如何にも其通りぢや、境とは己れに對する相手であるから、人でも家庭でも土地でも氣候でも社會でも自己以外の物は總て境です此境は本々自分の思ふ通りに行くもので無い、自分の思ふ通りの親子も十二分に氣に入つた夫婦兄弟も少ないものです、氣候でも暑からず寒からずといふ譯にはゆかぬ。社會でも境遇でも決して思ひのまゝには參らぬものです、「己が身の己が心に叶はぬを思はば物を思ひしりなん」何事も心に叶はぬが浮世の常である、それを思ふ通りにしやうとしたならば百年河清を待つてイ

ッ迄經ても決して安心の時節は無い、然るに小人は無暗に思ふ通にせんとのみ望むに依て多々益々煩悶を増し、怒つたり恨だり泣たり愚痴をいふたりして、此一生を不平不満の渦中に投ずるのである、君子は之に反して世の中の事は世の中の事として所謂因縁に任せつゝ、専ら己れの心を治むるに努めるのである乃ち我心を鍛錬して一面に外物の爲に誘惑せざる力を養ひ、一面には將來守るべく進むべき正しき道を踏へて行くから、苦みの中に在りても能く樂み忙はしき中に在りても能く靜かに恰も蓮花の泥中より出て、泥に染まらぬ様になるのである昔し薩摩の領主島津侯の菩提寺で福昌寺といふ大刹が鹿島にあつた、只今では鹿島より七八里も離れた處にあるが、維新以前は鹿島に於て國中第一の名藍であつた、その寺に住職した無三和尚といふは西郷隆盛公杯が師事したといふ傑僧でありました、此和尚は久志良村の久四郎といふ農家に生れたが、後に武家となつて島津侯に事へ晩年に至りて出家したのである薩摩の國風として士族を重んじ農工商を輕んじたから出家は殆んど士族以上に限られた、然るに無三和尚は百姓の子であり乍ら薩摩第一の巨刹に住し而も明日は晋山式といふて福昌



寺に乘込みの式を行なひ、尋で祝國開堂と申して、和尚は須彌壇に上りて、天皇陛下の萬歳と皇運の隆昌とを祝禱し且つ幾百の禪侶を相手として大問答をすることとなつたので國中至る處非常な評判であつた、或る寺の住職が甚だ嫉ましく思ひ何とかして和尚を失敗させんものと思ひ、潜かに鳥津侯に拜謁して「無三和尚は天晴なる禪僧なるも根が百姓の子であるからイザといふ場合になると恐らくは金剛不動の安心が備はつて居らぬかも知れぬ、それを試験するのが明日の大問答でありますから、侯自ら問答して和尚の實力を點檢せられては如何でありますか、尤もその問答は先方の不意に出ること之を試むるに適當ならん、依て「如何なるか是久志良村の土百姓と御問ひなされてはいかゞであります、是れこそ彼の眞面目を驗問するのであるに依て、宗乗の方から見ても頗る好題目であろうかと存じます」と吹込んだです、無邪氣なる侯は最と面白きことに思ひて之を承諾せられ、翌日は豫定の時間に行列凛々しく福昌寺に御乗込み、彌々問答といふ一段になると、侯は突然立て本堂の中央に跳り出し無三和尚に問ひて大音聲に「如何なるか是れ久志良村の土百姓」と問はれました、此不意の出來

事に並居る人々は、侯の心事を測り兼ねて一同が心痛して居りしが、和尚は毫も驚ける様子なく、而も面白さうにニッコリと笑ひを含んで聲も靜かに「泥中の蓮華」と答へられた、時に取ての答話といひ殊にその態度の正々堂々たるを見て、侯の感歎一方ならず是より一層御歸依なされたと申すことです、久志良村の土百姓と問はれたから泥中の蓮華と答へた乃ち私は全く土百姓で泥の中に生れたに相違ない、だが泥の中に生るはこそ蓮の華が咲くのであります、泥を人生と見れば蓮華は安心です、人生を離れて別に安心を得んと欲するは眞の安心では無い、凡夫は泥に溺れて益々煩悶に苦み、二乗は泥を厭ふて獨り自己の解脱に着す兩ながら眞の安心は得られぬ、此人生に處して能く上求菩提下化衆生の願行を成じ、而して天地の公道を履み諸佛の慈光に接し、社會人類と與に迷ひを轉じて悟りを開き惡に遠ざかり善に進み苦みを離れて樂みを得るこそ、安心中の大安心で、佛教の目的も亦是れに外ならぬのであります、故に吾々は先づ消極的安心を獲得し進んで積極的安心を決定し、更に進んで信仰的安心を得ることに努めねばなりません。



### 第五講 最高の人格

#### 一、人格を養成するは人道の本

人としては一般に名譽を貴とび利益を求め快樂幸福を期待するは、實に是れ自然の情である、併し不義の富貴は浮べる雲の如く、不正の榮譽は却つて其身を汚す様なものであるから、此等の欲求をして満足せしむるには、必ずや其根本を培養せねばならぬ、根本とは何ぞやといふに別では無い人格である、人格とは解り易くいへば人柄のことである、内に正しき信念を養ひ外には麗しき徳行を修むれば其人柄は益々立派なものとなる、若し之に反すれば忽ち其人柄は墮落するに極まつて居る、その人格を作るには必ず大に守る所が無ければならぬ、辯意經の中に委しく人間の道を説かれてあるが、要するに人格を莊嚴するの法を示されたものであります、其中の一端を擧ぐれば、人間に生るゝの道に五事ありと説いてある、人間に生るゝとは立派な人間になること、

見るが宜い、五事とは、一には「至誠人を欺かず、乃ち誠實の徳である、誠は天の道なり之を誠にするは人の道なりとあるが如く、人の人たる所以の道も其基礎は誠の一字にある、誠ならざれば物なして、誠の徳を缺きましては何事をしても其効果を收めることは出来ぬ、萬兩の金を積んでも賈金では一文の役にも立たぬ、如何に巧みなる御話をしても嘘があつては何にもならぬ譯のものであります」二には「經を誦す」是れは御經を誦むといふことであるが、ツマリ自己の智能を啓發すること、見て宜い、知識才能を研磨せざれば人の人たる徳は收められませぬ、知識は眼の如くにして能く善惡正邪を簡別して己れの進むべき方針を見定むるものである、如何に心が誠實であつても智能なき者は暗路に灯火なきが如くにして知らず／＼墮落の道に陥るゝの憂ひがあります、三には「戒を護す」戒とは佛の御戒めで即ち佛教道徳の紀律である、故に戒を護するといふは道徳を實行することである、貝原益軒が「人生まれて學ばざるは生れざるに同じ、學んで道を知らざるは學ばざるに同じ、知て行ふ能はざるは知らざるに同じ」といふた様に、如何程知識が勝れて居ても行なはざれば役には立たぬ、元



の世祖の頃に胡石塘と稱する學者があつた、自ら學問の堂奥に徹せりと思ふて誇つて居つた、或時世祖皇帝より拜調を仰せ付けられたから、此度こそは吾が出世する時節到來せりと思ひ、忝く衣冠を着けて拜調したは好いが、なれぬことゝて冠のゆがんで居るにも氣が付かず、其儘拜調を致した帝は一目御覽になると、「卿は何の學をか究めたるや」と御尋ねなされた、石塘コ、ぞと思ひ「臣は治國平天下の學を修めましてござる」と御答を申上げた、すると帝は笑ふて「自家の笠子すら尙ほ正ふることが出来ぬでは無いか、況てや天下を平らけん杯とは思ひも寄らず」と仰せられて遂に御前を退けられたとある、吾々の道德も亦是の如く、唯徒らに舌頭にのみ説くのでは全く其功は無いと思ひます、四には「人をして惡に遠ざかり善に就かしむ」乃ち人を教化利導して相共に道德を實踐せしむることである、五には「人の長短を求めず」乃ち妄りに人の長短を詮鑿して自ら反省するの心なき人は俱と語るに足らぬ者である、所謂徳あるは讚むべし徳なきは憐れむべしと承陽高祖の御仰せありしが如く、何人に向つても常に慈愛の情を以てせねばならぬ、以上の五事を五常の道に配當して見れば、

第一の至誠は信に當り、第二の誦經は智に當り、第三の護戒は義に當り、第四の人をして惡に遠かり善に就かしむとあるは仁に當り、第五の人の長短を求めずは、禮に當ることが出来やうと思ひます、此五事五常は人間普通の道を修むる標準である、此標準に従つて益々修養の功を積む時は遂には知識道德の圓滿完成をも期することが出来ます、佛陀大聖の境界と申したとて決して人間と關係を離れたものではない、釋尊も成道の初めに於て「一切衆生皆如來の智慧徳相を具す但妄想執着を以ての故に證得せず」と仰せられた、さすれば吾人本心に具有する智徳の兩性を發達せしめて圓滿の域に達したのが佛境界であります、併し此圓滿の域に進むといふことは容易に出来ぬ所から、人格の上にも優劣高低等無數の差を見るのである、其無數の差を概括して之を三等に分ちそれを順次に説明して以て最高の人格とは如何なるものかを述べて見たいと思ふのであります。

## 一、二、三等の人格



曹洞宗の復古翁と稱せらるゝ、円山禪師は、其廣録中に於て下の如きことを言はれてある、曰く

古來三等の人あり、一人は善を善として行なふ能はず、一人は勉めて善を行なひ勉めて惡を去る、一人は善を行ふて善を忘れ惡を去りて惡を忘る、是れ第一人は智ありて勇なく悶々として憂ふ、次の一人は智あり勇あり察々として苦しむ、復た次の一人は智を用ひ勇を用ひ兼て仁を用ゆ、穆々として安んず。

三等の人といふは人格を三階級に分けて説いたのであります、其中の第一は善を善として行ふ能はず、惡を惡として去る能はずといふのであるが、これは知識ありて實行の之に伴なはざる底の人である、古人も人々一段の光明の在るありと申して、吾々には其天性に於て立派なる良知良能を有して居る、最劣等の野蠻人や動物ならばいざ知らず苟も相當の人間であるならば、必ずや良心なるものを有して居る、況てや多少なりとも文明の教育を受けた程の者は、人事上の大體に於ける善惡邪正を辨別する丈の能力は有て居るに違ひ無い、然るに悪いと知りつゝも中々に之を止むることが出來ず

善いと知り乍らも容易に之を行ふことの難いものであります、王陽明は知行合一を説いて「知は是れ行の始、行は是れ知の成れるなり、若し會得する時は只一箇の知の在るあり」といふた、知識も眞の知識となれば自づと信力が伴ふものであるから自然と行の上には現はれて來る、精神の中心力となつたのが眞の知である、一度此眞知が現はれば、萬事萬行は皆な眞知の上より發動するに相違ない、だが淺薄なる知識は決して精神の中心力となることが出來ぬ、漸く精神界の一隅に割據して居る位のものであるから、その中心は矢張物欲とか情慾とかいふものが威張つて居るものです、太田錦城は悟窓漫筆の中に「逸欲を有邦に教ゆる無れ」といふ尙書の語を引て、桀紂幽厲の様な暴君でも、決して淫逸をなすべし嗜欲を肆にせよといふ號令を出して人民に教えた譯では無い、矢張忠孝道徳を以て人民に教へたのであるが、忠孝道徳を教へ乍らも自分自らが之を守らずして淫逸邪欲を肆にしたから、下々の人民も放逸無慚となり、天下は忽ちにして騷然として亂れたのであるといふ風に論じてある、堯逸天下を率ゆるに仁を以てし桀紂は天下を率ゆるに暴を以てすといふたのも、堯舜は仁義を實行し



架紂は暴戾の振舞を爲したのをいふたのである、是れ「民の上に從ふや其令する所に從はず其行ふ所に從かふ」の理であります、現在の我が帝國には三萬五千有餘の學校があつて熱心教育に従事して居る、吾々の理想から申せばマダマダ十分とは申されぬが、兎に角教育の恩恵は津々浦々に至るまで殆んど及ばざる處は無い、而して物質的文明の進歩は實に驚くべきものであるのである、然るに退いて仔細に精神界の状態を観察して見たならば殆んど之れと反比例に益々退歩の兆候を呈して居りはしないかを疑はれる、生存競争の次第に激烈になる爲めでもあらうが、一般に名利の念と物欲の情とが段々増長して來る所から、折角の知識も多くは悪い方面にのみ濫費せられる様な有様である、何故にこの様に淺ましき人心となつたであらうぞといふに、これには色々の原因もあるには相違ないが、その根本原因は信念の缺乏と謝恩の觀念が薄くなつた爲めではあるまいか、太田錦城も曾て「放蕩淫縱の心には神は宿り玉はず、權謀を肆にし詐力を奮つて功利にのみ外馳する心には神は宿り玉はず、唯榮根を咬て寒苦を忍び、本心に復して君父の恩を思ひ、天地鬼神の冥鑒に背かざる事を思ふ心に

は神とゞまり玉ふべし」といひ、又「父母先祖爵祿財寶を傳へて安坐して美衣腴食する者は是れ父母の恩なりと思ひ、獨力にて家を興し身を立るものは露塵ほども父母先祖の恩徳なしと思ふ、是大なる僻言なり、如し父母先祖無道非義ならんには我身は海嘯に遭て死すべし、先祖の餘殃にて天罰を蒙りて天地の間に食息すること能はず」云云と説てある、實に親切なる教訓であらうと思ふ、吾々にして神を奉じ佛を信じ、神佛の冥鑑を畏れて其獨りを慎み、君主及び父母等の恩徳を感戴して其御恩に報い奉らんとする志が厚くあるならば、此信仰觀念の力に依りて善良なる知識は常に精神界の中堂に穩坐して自から一身の主宰となるに依て、必ず君臣道合知行合一の美果を收むることが出來やうと思ふ。

### 三、忍耐と勤勉

次には「勉めて善を行なひ、勉めて惡を去る」といふのが修養に現はれた人格であるから、國家社會の上から見ても實に頼もしい人柄であります、此「勉めて」といふ字が



總ての修行力を含蓄した辭です、勉めてといふは情を採め欲を忍へ精を勵まし憤りを發して善行を勉強して行ふことであるから、非常なる忍耐と努力とを要することは言ふ迄も無い、菩薩には六波羅蜜と稱して其行ふべき箇條が六通りある、乃ち布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧とである、前の二つは重に他人に對する上の務めて、後の二つは重に自己を薰陶するの行です、布施は同情慈愛の念を以て一切衆生に利益と幸福とを與ふこと、持戒は道德的紀律を嚴守して他人を損傷せず進で他人を満足せしむるの務めであり、禪定は自分の精神を調へて散亂妄動を防ぎ靜かなること山の如しといふべき境界に止住すること、智慧は自己の本心を明らかに生死の原理を究め迷悟善惡に因て分るゝ所以の道を識別し一切の事理に於て惑ふ所なきの謂である、此禪定と智慧とが發達すれば我が禪門の所謂王三昧に安住する事も得るのであります、此前後の四大行は自覺覺他の標準にして三世の諸佛十方の菩薩に共通する必須の修證である、之を擴充する時は世間出世間の所有智慧道德をも包容して漏す所なく、修身齊家治國平天下より佛身の顯現、佛國土の成立も皆な之を本とする程のもので、併し

此四大行を修むるには是非とも中間の忍辱と精進との力に依らねばなりません、忍辱は忍耐で精進は勉強である忍耐と勉強此二者の者は此四大行輪を進行せしむべき原動力であります、中に就て忍耐には三種の方面がある、一には耐怨害忍、是れは他人が我れに向つて怨憎毒害を加ふるとも妄に腹を立てぬことである、二には安受忍、是れは疾病とか水火刀杖等の壓迫を受くとも、それを耐へて恬然不動たることであるから、俗に云ふ辛抱強きことです、三には諦察法忍、是れは諸法の本體を諦觀精察して本來平等にして差別なく、差別の相は因縁に依て生ずる一時の幻影に過ぎざることを知り見聞する諸法に於て毫も迷惑顛倒せざることである、又諸經要集には三種の忍行といふことを説てあります、それは一には身忍行、此身體に對して種々の迫害を加へられても能く忍んで瞋恚を發せざること、二には口忍行、縦ひ人より惡口罵詈を浴せ懸らむることありとも、聞さし後までも忍び了せて更に忿り恨むる心を起さざることである、此等の忍耐力は全く求道の勇氣の現はれであるから、從晝至夜勉め勵んで此の勇



氣を薰鍊せねばなりませぬ、次に精進は即ち勉勉の力であり、精は純一無雜の謂であるから、悪い事や非法なる事には更に關係せず、善なる道真なる理想に向つて猛進勤行するとであります、佛教に於てその精進の大方針を四通りに示して四正勤といふことを申してある、正勤は正しき勤めで、是れに四通りある、一には「已生の惡は永く斷ぜしむ」乃ち惡念を制し惡業を制して身口意の三業を淨潔にすること、二には未生の惡は生ぜざらしむ、乃ち將來生ずべき恐れある惡念惡口惡業は自ら斷乎たる警誡を施して永く生ぜぬ様にすること、以上は消極的精進である、三には「已生の善は増長せしむ」乃ち已に生じ初めたる善念善語善業は益々相續し且つ發達せしめて之が大成を期すること、四には「未生の善は生ずることを得せしむ」、乃ち是れから爲すべき善行は暫時も油斷なく之が實現を期すること、是の如き標準に依て勤勉力行せねばならぬ、グラットストーンは「予は常に一小冊子を懐中する事を忘れず之れ余は不慮に來る一分の空時間をも逸せざらんが爲なり」といふて生涯を通じて勉強せられたとある、況や我が本師釋尊の如きは自覺々他の行持を完成せんが爲めには娑婆往來

八千返の御辛勞をも遊ばされた大般若經を拜見すると「五百世の間忍辱仙と爲る」乃ち堪忍の行を五百生も修められたといふてある、猶ほ經論の中に或は肉を割て父母を養ふたとか、或はその身を鬼の口中に投じて教へを請はれたとかいふ様な因縁が澤山あるが、是れ等は皆な釋尊が勤勉努力の範を示されたものである、吾々御互は自ら精力を鼓して飽までも力行主義を執らねばならぬ。

#### 四、最高の人格

最後に、「善を行なふて善を忘れ惡を去りて惡を忘る」といふのが、所謂最高の人格で、吾々の理想とする所のものであります、忘るゝといふは力を費やさぬことである、力を費さぬから別に報酬を期する念もありませぬ、善を行ふて息まらず惡を去りて屈せざる時は、心も純良になり身の行なひも潔白になり口の働も正直になる、而して朝にも善を行なひ夕べにも惡を去り、久々に努力精進して倦まざる時は、自然にその道徳行爲が一の習慣となつて了ふものである、總ての行爲に就て爲さねばならぬと思ふて



爲すのと、爲さずに居られぬ様になつて爲すとの二つがある、前の勉強努力して行ふのは、なさねばならぬ方で、今の忘るゝといふは、なさずには居られぬ方でありませぬ、乃ち道徳的行爲が一種の習慣性となつて了ふたのである、例せば朝起の如き、初めの中は勉強して起るに依て中々の辛抱であるが、月を積み年を累ぬるに従がひて、それが習慣となつて、後には寢て居れといはれても寢て居られぬ様になる、世の倫理學者が徳といふことを説明するにも「吾人が本務を實行すること屢々する時は習慣性を生ず之を徳と名くるのである、例せば常に勉強して息まされば勤勉の徳を生じ、常に勇敢の行爲をなせば勇氣といへる徳を生ずる類である、その徳目は無量無數であるが、御勅語には忠、孝、友、和、信を始め、恭儉、博愛、勉學、勤業、廣益、開務、遵法、義勇等の徳を示し玉ひ、軍人への御勅諭には忠節、禮義、武勇、信義、質素の五徳を御示し下され、戊申の御詔書には和合、忠實、勤儉、信義、醇厚、質素、自強等の諸徳を御勸奨あらせられてある、此等は何れも徳の大綱を御標示下されたのであるから、此大綱の中には三千の威儀八萬の細行も皆盡く含蓄して居るのであります。此等の

道を修め行ふて不休不息なれば、自づとそれが習慣性となつて、知らず／＼三業の上はその徳が實現する様になるものです、之と同時に此徳に反對する悪い事は爲よと頼まれても出来ぬ様になる、彼の孔夫子が「富と尊とは是れ人の欲する所、其道を以てせざれば之を得るも據らず、貧と賤とは是れ人の惡む所、其道を以てすれば之を得るも去らず、君子仁を去り焉んぞ名を成さん、君子は食を終るの間も仁に違ふこと無し、造次にも必ず是に於てし顛沛にも必が是に於てす」といはれたるも、最早最高の人格に進んだ人の状態でありませぬ、中庸には「或は安んじて之を行ひ、或は利して之を行なひ、或は勉強して之を行なふ」とあるが、安んじて行なふといふのが最高の人格に當ります、古典に「之に安んずること性の若し」とか「安んじ服なふこと性の若し」とある通り、別段に善を行なはふといふ心を起さんでも、其行なふ所が自然に道に合するをいふのである、中庸に「誠は勉めずして中り思はずして得、從容道に中るは聖人なり」とあるのもこれです、勉め／＼て息まされば遂に此地に達することは勿論であるが、吾々凡夫は兎角に欲望の念に引かれて所謂三歳の孩兒も之を知ると雖も八十



の老翁も之を行なふこと能はずで、中々容易に此位地に進むことが出来ぬものである、それを知らず、此位地に進むの良法は全く信仰の力に依るのが捷徑であります、忍耐強して道徳を行なひ勵むべきは勿論であるが、之と同時に正しき信念を涵養することが必要である、信念ある者は所謂欲望を離れ我執を離れ、而して無量の慈悲と無限の智慧力とを有し玉へる佛陀大覺の境界に歸命し奉るのであるから、人を相手にせずして佛を相手にし、名利を目的とせずして菩提を目的とし、現在一世に眼を注がずして未來永劫に思ひを存するに依て、常に惡を離るゝ許りもなく進んで惡衆生を救済せんと思ひ、善を行ふのみならず、進んで一切衆生をして善を行なはしめんと思ふのであるから、その道を行なひ徳を修むる上に於て、無限の歡喜と無限の感謝とが伴ふて來るものです、之を無我の信仰とも、不動の安心ともいふのである、昔し百丈禪師は八旬の高齡に達し門下に數百の徒弟を聚め、徳一世を風靡し乍ら、毎日他の雲水と與に掃除をしたり草取をしたりせられた、侍者の僧等が御氣の毒に思ふて窃に掃除する道具を隠した致方が無いから其日は掃除をせられななだが、其日に限り御飯を召し

上らぬ、侍者は心配して色々に勧めたがとうしても食がらぬ、強て其譯を御尋ねせしに「一日作さざれば一日食はず」、一日でも爲すべき事を爲ねばどうも勿體なうて御飯を戴く譯にはゆかぬとの仰せであつた、なんと有り難き志しではありませんか、是れ全く内に信念ありて外、道業に勵み、遂にその行持が習慣性となられたのであります、洞山大師が「潜行密用愚の如く魯の如し」と仰せられたのも、此人格に對する説明であります、承陽大師が「水鳥の行くも返へるも跡たえてされども道は忘れざりけり」と仰せられ、「守るとも思はずながら小山田のいたづらならぬ僧都なりけり」と詠じ玉ひしも、皆な最高の人格を禪定の上から御示し下されたものであります、此事に就ては更に一步を進めて禪的修養の上から説明する必要があるが、これは他日に於て改めて御聞に入れること、致さう。



### 第六講 御聖徳一斑

#### 一、罔極の天恩

謹つしんで 今上天皇陛下きんじやうてんのうへいかの御聖徳ごせいとくを拜はいし奉たてまつるに、允文允武いんぶんいんぶ乃神乃聖なかしんなせい、浩々かうかうとして天てんの如ごとく昭々せうせうとして日ひの如ごとく巍々ゑいゑいとして山やまの如ごとく洋々やうやうとして海うみの如ごとく、僅わずかかに其一斑そのはんを叙のべ奉たてまつるだに、管見くわんけんを以もつて蒼天さうてんを窺うかがふの觀くわんがあります。併しかし吾々われわれは 陛下へいかの赤子せきしなるを以もつて稚兒ちじの慈父じふを慕したふが如ごとく寝ねても寤さめても、陛下へいかの御聖徳ごせいとくを景仰けいやうし奉たてまつらざる時ときとは無いのであります、依よつて只今ただいまは、御聖徳ごせいとくに關かんする大海たいかいの一滴てきを汲くみて、吾々われわれ赤子せきしの肺はい肝かんを潤うるほし、以もつて將來しやうらい益々いひま罔極むごくの天恩てんおんに酬報しうほうし奉たてまつりたいと思おもふのであります、謹つしんんで惟おもるに、

今上天皇陛下きんじやうてんのうへいかは明治天皇第三めいじてんのうだいの皇子わうじにておはしまし、明治十二年八月三十一日めいじにじふにねんくわつしちじゅういちにち御降誕ごかうたんあらせられた、同おなじく九月六日くわつにちゆうくわつろくにち宮中みやちゆうに於おいて御命名ごめいめいの御式ごんしきありて御名ごんを嘉仁親王よしひとしんのうと申まをし明宮みやと稱なづせられ給たまひぬ、斯かくて當時たうじ東京市麴町とうきやうしかうぢまちにありし伯爵中山忠能卿はくしやくなやかやまたよしきやうの邸内ていないに設まつけられし新御殿しんごてんに移うつらせ給たまひ、忠能卿御夫婦たよしきやうごふうふ及び從二位慶子じゆふにたけこの方かたの御養育ごやういくを受けさせ給たまふた、忠能卿たよしきやうは明治天皇めいじてんのうが御幼少ごちゆうせうにて祐宮すけのみやと稱なづせられ給たまひし折御養育せりごやういく申まを上げしといふ最も貴たかとき御方ごかたである、陛下へんかの御兄ごあにの皇子くわうしは御二方ごふたかたとも御早世遊ごさうせいあそばされしかば、明治二十年八月三十一日めいじにじふねんくわつしちじゅういちにちに東宮とうぐうの御宣下ごせんげを受けさせ給たまひ、同おなじ時に陸軍少尉海軍少尉りくぐんせうぶかいぐんせうぶに任にんぜられ給たまひ大勳位だいくんゐを帯おび近衛師團このゑしだんに屬ぞくし給たまひき、同年九月十九日ねんぐわつじゅうじゅうくにちには八年二月はちねんにげつの御齡ごんよひにて學習院がくしふゐんに御降學ごかうがくあらせられ、八年の間御通學遊おんたうがくあそばされた、二十二年十一月三日にじふにねんぐわつしちじゅうさんにちに立太子りつたいしの御儀ごぎありて皇太子くわうたいしに立たたせ給たまひぬ、二十五年にじふごねんに中尉ちゆうぶに二十八年にじふはちねんに大尉たいぶに三十年さんじゅうねんに少佐せうさに任にんぜられ給たまひ、それより次第しだいに陸軍中將海軍中將りくぐんちゆうじやうかいぐんちゆうじやうに御昇進遊ごしやうしんあそばされ給たまふ、三十年七月さんじゅうねんしちがつに御成年ごせいねんに達たつせられしかば貴族院きぞくゐんの議席ぎせきを占しめさせられ、三十三年五月十日さんじゅうさんねんごがつじゅうにちに公爵九條道孝卿こうしやくくわうぢゆうたかきやうの第四女節子姫よしかさねひめとめでたく御成婚ごせいこんの大典たいてんを舉あげさせ給たまふた、先帝せんてい陛下へいかは陛下へいかの東宮とうぐうにてましませし時とき深く御教育ごけういくに御意ごいを注そがれ、故有栖川宮威仁親王こありすかひのみやたけひとしんのう殿下でんかと元帥公爵大山巖げんすうこうしやくおほやまいはらとに御輔導ごほだうの大任たいにんを仰付あふせつけられ、其他故伊藤公士方伯曾我子爵その他こいとうこうしちかたはくそがししやく



奥元帥故黒川中將等一代の名臣をして奉仕せしめられた、御學問の上では漢籍は初めは故川田剛、後には三島毅御進講を申上げられ、佛蘭西語は、三田守眞御教授申上げ、世界史政治學經濟學等は故男爵箕作祥麟御進講申上げ、軍事上の御教育も皆な經驗に富みたる將官を抜擢して御教導申上られた、是等の御講話を御聴き遊ばさるゝ時は全く師禮を以て對せられ、武術の御研究には、教官の御注意申上ぐる事及び號令等は都て嚴重に御守り遊ばされ、固より聰明睿智の御天性なるに御研究に御熱心なると殆んど絶倫にてあらせらるゝに依り、その御成績の優れさせ給ひ御造詣の深くましますことは凡慮の計り及ばぬ所であると承はつて居ります、陛下は御年十八歳の折御胸部の御病を憂ひさせ給ひしかば先帝陛下昭憲皇太后陛下には殊の外大御心を痛めさせ給ひ、之を漏れ承はる臣民一般も一方ならず御氣支申上げ奉りしが、幸にして幾程も無く御平癒あらせられ、その後は年一年と御雄健を加へさせ給ひ、東宮にておはせし御時、地方へ成らせ給ひて御登山などの御遊を試み給ふに、御歩み速かにましまして聊かも御苦痛の色を見受け奉らず、却つて侍從の人々御後より遅れて喘ぎ乍ら追ひ奉る程の

御事多しと承はる、御踐祚の前年、騎兵特別演習を御見學あらせられし折、騎兵隊の馳突と共に親しく御馬を駆らせ給ひしが、此騎兵演習に参加して電光の如く驅り廻ることは千軍萬馬の實戦に心膽を鍊り鍛へし將軍等さへ苦む者少からざりしに、陛下には始終御疲勞の御様子もまします、玉鞍の上に御手綱を取りて縦横に御騎行遊ばさるゝ御雄姿の御勇ましさには、參加將校一同の敬服して已まざる所なりしといふ、御踐祚以來重ねて御諒闇の間に御悲歎の御涙に咽び給ひ、一方には間斷なき國家の大事に霄食肝衣の御辛勞を遊ばし給ひしに拘らず、御玉體は彌増御健康に渡らせ給ふと承はる、實に天長地久に御榮え目出度き大正大御代の慶祥これに過ぎたることとはあらず、吾々臣民は大御代の千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむす迄も彌榮えに榮えまさんがことが確信せられて欣喜の至りに堪へませぬ。

## 二、絶大なる御聖徳

我が大聖釋尊は、「孝順は至道の法なり」と仰せられ、儒教にても「孝は徳の本なり」



と申してあるが、陛下も亦た實に御孝徳に於て殊に御優れさせ給ふて居る、日清役に、先帝陛下は御親征の大勲を廣島に進めさせ給ひけるが、當時皇太子にてまじませし陛下は御機嫌伺ひとして彼地へ御成り遊ばされ暫く御滞留あらせられしに、或夜先帝陛下の御行在所附近に出火があつた、陛下は直に御見舞の爲に御參内の儀を仰出され、火急の御事殊に夜中なれば御車駕の御用意も手間どりしかば之を御待せ給ふ御暇もなく、御徒歩にて御行在所に駆付け給ひ、御父帝の龍顏御麗しきを拜し給ひて初めて御安堵まじませしといふ、東宮として住まはせ給ひし青山御所には御眞影の御間ありて、先帝陛下より東宮御宣下の折に親しく御授け給ひし歴代東宮御所持の寶劍壹切と御父君御母君兩陛下の御尊影とを奉安あらせられしが、陛下には毎朝御盥嗽の御後に御紋服を召し給ひ御威儀を改め給ひて此御間を御拜禮遊ばす御習慣を一日も廢させ給はざりしと承はり居ります、又先帝御大患の當時の如きは御不例にて渡らせられしが、まだ十分御全快に至らせられざるに、御看護に御努め遊ばされ御崩御の曉まで殆ど御一睡だも遊ばされぬ程に御盡し遊ばされしとも承る、御崩御後は照憲皇太后陛下に盡

させ給ふ御孝心最と深くいらせられ、行幸先にも御食前には必ず皇太后陛下のまじます方に向はせられて御叮嚀に御禮拜遊ばされし後ならでは御箸を取らせ給はざりしと申すこととであります、殊に皇祖皇宗を初め奉り御父君御母君の御神靈に對せられての御孝情は實に此世に在まするを面り御孝養あらせらるると少しも變らぬ御敬虔を盡させ給ふ、洵に吾々臣民の謹んで傲ひ奉るべき懿範であります、又陛下の御仁徳の廣大なるとは全く先帝陛下を拜し奉ると御同様で實に感泣し奉の外はありません、また東宮にて在ましける明治廿九年の頃日光へ行啓の御途次、今市驛へ暫く御停車遊ばされしに、佐藤栃木縣知事を初め重立ちたる今市の町民等プラットホームに整列して御出迎へ申上げしが、陛下は其中に一人の翁の胸に綠授褒章を帯びたるを御覽遊ばし、彼は何者ぞとの御下問あらせられしかば、關根彌作と申して公共事業に熱心なる者の由を佐藤知事より御答へ申上げしに、陛下は奇特の者よと仰せられた、彌作はあとにて此事を知事より承はり光榮身に餘る嬉しさに翌日御旅館まで伺候して御禮を申上げんと思ひ立ち、今市より三里の路を徒歩して日光に向ひしが、八月の炎天の下に日射



病を起し途中より引返したるまゝ危篤の容態となりぬ、其日御旅館に伺候したる佐藤知事より御話の序に此事を申し上げしに、陛下は恰も程近き御散步より歸らせ給ひし御折にて銀の飾りある御洋杖を御手に遊ばしけるが「そは誠に不憫なり此杖を其老人に取らせよ」と仰せられつゝ、御手づから御洋杖を下し賜ふた、知事は大御心の慈仁に在ますを感泣し乍ら、直に彌作の家を訪ひて恩命を傳へしに、彼は臨終の床に恩賜の御洋杖を捧持して感泣に咽びつゝ安らかに絶命したと申すことである、又東宮に在ませる御時、或日御遊獵に出で立たせ給ひて一頭の鹿を御手づから撃ち止め給ひしが御旅館に歸らせ給ひし後其死したる鹿を御覽あらせられ最と御不憫に思召しければ

面白く撃ちはしつれど鳴く鹿の

聲さく時は哀れなりけり

といふ一首の歌を御口ずさみ遊ばされた、御近侍の人々は何れも御仁徳の禽獸まで及ぶ有難さに感泣しけるが、其中の一人は謹みて

哀れてふその御言葉に古への

うが野の鹿も音をや添ふらん

と御答へ申上げ奉りしといふ、又同じく東宮の御頃、御遊獵に出でさせ給ひしに、終日野山を狩り暮し給へど此日は生憎鳥獸の影さへ見えななんだ、餘りに興なき御有様に見えさせ給へば、其邊の地理に通ぜる勢子頭の某が如何にもして御興を添へ奉らんとし密に何處よりか家兎を持ち來り、陛下の進ませ給ふ好き機会を窺ひ奉りて勢子を指揮しつゝ之を追出しけるに、陛下は之を御覽せられ直ちに御銃を擬せんと御身構へあらせられしが、遽かに思し止らせ給ひて侍臣を召し、かの兎は跛なる上に野に慣れぬ様あり想ふに飼兎ならん、今日獲物なければ我が不興を慰めんとて何者かのなせし業ならん、されど我れは勇氣を養ふ爲にこそ銃獵をすれ、徒らに生物を殺すことを好まず、さる兎は撃たじと仰せられ、却て御不興の御様子に拜せられければ、侍臣の人々人恐懼し奉りて直ちに有りし事實を取調べ、前記の次第を申上げて勢子頭某に至るまで謹慎して罪を待ちたるに、唯だ「以後を慎しめ」と御寛大の仰せありしのみにて深くも咎めさせ給はざりしかば、皆々重ねくの御仁心に感泣し奉りしと申すことである。



### 三、御真情の發露

先帝陛下はその御文徳古今に秀でてさせ給ひて御製の御歌の如きは八九萬首の多きに及ひ給ひ、世舉つて歌聖と稱へ奉る程であらせられしが、今上陛下に於かせられても正しく御父帝の御薫化を傳へさせ給ひ、御少年の御頃より、詩歌に御熱心にあらせられ吾々が洩れ承る御製を拜しましても世の徒らに浮華なる修辭の末に泥めると異り、直ちに御真情を御發露あらせられてあるから、御製の一々が御孝心と御仁徳との表現で吾々の身に取りては實に廣大無邊なる御教訓として拜し奉るべきものであります、その内の數首を記し奉れば

松上鶴

山松の梢にすだつ雛鶴も親に習ひて千代呼ばふなり

新年山

新玉の年の初めに仰ぎけん君が御稜威の彌高の山

新年河

たひらかに年浪かへる五十鈴川神の恵みの深さをぞ汲む

雪中松

ふり積る頭の雪ぞあはれなる老木の松は人ならねども

新年雪

年立ちて降る雪見ても大君の深き恵みを入仰ぐらん

河に臨ませられては神の恵みの深さを汲み給ひ、雪に對せられても御父帝の大御心の忝じけなさを感給ひ雪に立つ老松にも老ひたる者の身の上を憐れに思召し雛鶴の初聲にも孝子の真情を察し給ふ、實に陛下の御言の葉の如きは孝順慈悲の光明とも見奉つるべきものではありませんか此御慈悲ありて而して雄健世に類ひ無き御勇氣に富ませ給ふ、彼の老聃が「天下の至柔は天下の至堅に馳騁す」といへしも斯かる御聖徳を言ひ表はしたものと思はれます、陛下は實に天稟に御仁徳を備はせられしものと見え、まだ御少年に渡らせ給ひし或年の夏、鹽原に御避暑の折、停車場より人車に召して御



用邸に赴かせ給ふに、附近の者にて、豫て御用を承はる車夫田代某、この日も御車を挽き奉りしが、如何しけん御用邸近くなりて突然眩暈を起して卒倒したのである、供奉の人々驚懼し乍ら既に遠くもあらぬ御用邸に御案内申上しが、陛下はやがて今の車夫は如何せしぞとの御仰せありければ、供奉の人々より車夫は卒倒せしまゝ遂に敢なくなりし旨を申上げしに、「まことに不憫なる事なり遺族の者に恵み遣はせ」と仰せられて若干の金を下し賜ひ懇ろに遺族を慰めしめ給ひしといふことである、又東宮にて在しましける時四國の屋島に行啓あらせられ御徒歩にて御登山遊ばされしが、御健脚に任せて進ませ給へば供奉の人々は何時しか遅れ參らせ、陛下は唯御一人にて「弘法大師不食の梨」といふ物ある一軒の茶店にまで達し給ひ、店の主人に「頂上まで猶幾丁の路ありや」と問はせ給ひしに、さる高貴なる御方とも知る由なければ、素朴なる言葉にて「八丁餘りあり」と答へ奉る、陛下は聞召して「それは少し辛し」と仰せありてやがて其鄙びたる店頭に御腰を下させ給ふた、さて奥の方を御覽遊ばさるゝに八歳計りの少女が其顔に縷帯して居りしゆえ、「かの少女の顔は如何にせしぞ」と問はせ給へば

主人は「洋灯にて怪我せしなれば今日東宮殿下の御巡啓あらせらると承はり、せめて御影をだに拜し奉らんと申せど、かの姿にては畏れ多しと存じ彼處に控へさせたり」と申せしに、陛下はいと興あることに思召され、「此處へ伴れ參れ」と仰せられ、畏多くも御側近く召寄て年齢を問ひ名を聞かせ給ふ、程なく供奉の人々追ひ付き奉りしかば茶店の主人も少女も始めて東宮殿下にて在ますことを知り奉り勿體なさに感泣したと申す有難き美談もあります、猶ほ日獨戦争の折に戦死者の遺族を憐み給ふては「國のため斃れし人の家人はいかにこのよを過すなるらむ」「ぬさかたき壘ぬかんと捨てし身を慕ふ妻子やいかに悲しき」の御製あり、戦利品を御覽遊ばされては「ものゝふの命をすて、戦ひにかりし稜物は尊かりけり」との御詠あり、此御製を拜し奉ても、陛下の御仁徳の御光りが花よりも御麗はしき御真情より現はれて隅の隅までも御照し下さることが窺はれて、實に忝けなさに涙がこぼるゝではありませんか。

#### 四、皇后陛下の御坤徳



允文允武の御聖徳に富せ給へる天皇陛下と相並んで最も坤徳に優れさせ給へる皇后陛下の在ますあり、吾々國民は恰も日月雙び懸る智照と慈光との下に於て飽まで其恩徳に浴し奉るを得るは實に幸福の極みである皇后陛下は、英照皇太后陛下の御弟君なる故従一位大勳位公爵九條道孝公の御女に渡らせられ、御生母は中川の局と稱せし野村幾子の方である、陛下は明治十七年六月二十五日に御降誕あらせられ、九條家の御家例にて直ちに東京府下中野在杉並村農家大河原金藏の許に養育を托せられ、明治二十一年十一月十日まで五年の間同人妻てい女を御乳母として御健かに御成長あらせられた、こは御子の健康の爲にわざ／＼斯る家例を定め給へるものと承はる、明治二十二年の春御學齡に達し給ひて華族女學校に入らせられ、高等科まで修めさせ給ひて明治三十二年に御退學、此十年の間に御缺席遊ばされしは、御伯母君に渡らせ給ふ英照皇太后陛下崩御の御喪に服させ給ひし御時と、三十一年の冬御授業中に御氣分の優れさせ給はぬ御様子を御受持教員の拜見して暫らく別室にて御休息あらせらるゝ様御勸め申上げし爲め僅に三十分間御缺席遊ばされし折との兩度のみにおはしますと申す御

事である、學習院御退學の後には更に國文學を本居侍講より漢文學を三島侍講より佛蘭西語を三田守侍講より音樂を幸田御用掛より習字を小野御用掛より御教授申上げ何れも御熱心に學ばせ給ひしと承はる、かくて御年十七歳の明治三十三年五月十日を以て皇太子妃に冊立あそばされ、三十四年に皇子廼宮殿下を三十五年に淳宮殿下を三十八年に光宮殿下を擧げさせ給ひ、四十五年七月、明治天皇崩御まし／＼今上陛下九五の御位を踐ませ給ふと共に皇后の御位に立たせ給ふたのである、陛下は最も圓滿なる御淑徳を有せられ、殊に御情け深くましまし御養育申上げたる御乳母てい女の勞苦を思召し同人に次の如き御歌を書き與へ給はりしといふ

むげに幼かりける程住みける里の事を思ひ出て、

昔しわが住みける里の垣根には菊や咲くらん栗や笑むらん

物ごゝろ知らぬ程より育てつる人の恵みは忘れざりけり

又皇太子妃の宣下を受けさせられ御大婚の御日の近ける御時、九條家に於て陛下を御輔導申上げし講師の人々を招ぎ多年の勞を謝せんと御用意ありたるに、陛下は初等科



の折に學びたる講師等をも招かんことを特に父君に御願ひ遊ばされしとの御事である、かく陛下が恩義を重んじ師導を向ひ給ふ御行なひは皆な廣大なる御愛情より出でたる大御心である、華族女學校に御通學遊ばされける御時常に九條邸より御徒歩にて御往復あらせられ、御衣服髪飾を始め其他の御用具まで御質素を旨とせられ、恐れ入る程御儉徳を守らせ給ひしとの御事です、或年の夏の眞盛に、武官某が御馬場にて馬術を御覽に入れ奉り全身を汗に濡らしけるが、終りて退り出でんとせし時、聖上の御恩命にて浴湯を賜りしに、陛下は汗に染みしシャツズボン下、靴足袋などを再び着るは心地悪かるべしと仰せられ、女官に新たな品を夫れく取揃へしめて御下賜あらせられしかば、其武官は身に餘る幸を喜び涙に咽び乍ら退出せられしと承はる、されば陛下の御堪能なる御和歌を拜し奉りても、聖上陛下の御製の如くその一々に甚深の御孝情と御慈愛とが溢る、許りに現はれて居ることが感ぜられます。

新年梅

新玉の年のほぎごといひ交す袖にもかほる梅の初花

新年松

門松の緑りも清きあしたかな塵や拂へる年の初かぜ

社頭松

松風も神の心に靡きつゝ枝を鳴さぬ御代まもるらむ

寒月照梅花

香をとめて訪ふ人もなき梅園を夜ごとに照す月の影かな

恤兵看護婦

かなし子を人にまかせて戦人すくひに出るをみなかなしも

軍人遺族

なき夫のおこせし文を記念にて心細くも年月をへむ

恐れ多くも 今上陛下 皇后陛下の御聖徳は實に 明治天皇昭憲皇太后兩陛下の御聖徳をそのまゝ承け繼がせ給へるものにて、其御鴻恩は南山よりも高く北海よりも深く

ましますと頌し奉るべきものであります、吾々は斯る 兩陛下を戴き奉りて飽ま



でも御仁徳に浴し奉るといふは何といふ幸福なることでありませう。

### 五、國民報恩の正道

釋尊は心地觀經に於て「恩を知り徳に報ずるは是れ聖道」と仰せられてあるが、兩陛下の御鴻恩の甚大なることを知り身心を捧げて御仁徳に報じ奉るは、正しく是れ佛法の行持、聖賢の所期であつて、成佛作祖の功德も皆な此中より生み出されます、併し恩に報ずるの道はどうであらう、我が宗に於ては其道を教ゆるに「其報謝は餘外の法は中るべからず、唯常に日々の行持その報謝の正道なるべし」といふ御示しがある、乃ち唯有り難いと思ふた許りでは報謝にはならぬ、乃ち日々の行持を全ふして完全なる義務を盡し、兩陛下の大御心に副ひ奉る様に致してこそ始めて報恩の實を得たものと謂べきである、その行持の標準は外では無い、彼の教育の御勅語と戊申の御詔書と軍人の御勅諭との三大詔勅が我が帝國無比の經典である、老若男女を論ぜず、齊く此三大詔勅を奉戴して平生の言動に於て之れが實踐躬行を努めたならば、我が佛教に於て

教ゆる所の三學六度四攝十戒も皆な此中より發現するものです、併し單に名利の情や義務の念のみを以て人道を守らば、縦ひ佛教の三學六度を修得するとも依然として凡夫の活計たることを免れぬ、若し又清淨の信念を以て之を行ふ時は忠臣孝悌は言ふに及ばず、治生産業の務めも皆な永遠の佛徳を圓成すべき大菩提の行持となるものである、故に吾々佛教信者としては金剛不壞の信念を發起することが肝要です、信の本は誠である、誠といふは嘘偽りの無い我見我慢の無い、私欲私情の無い本心の現はれてある、「八百の嘘を上手にならべても誠一つに叶はざりけり」、「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らん」、誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり、この誠を得るには、内には邪念妄想を離却し外には種々の誘惑を防禦するの用意が無ければなりません、此誠を得れば自然に神の心に叶ひ佛の心に合し天地の精神にも相應するものです、此心を以て佛の慈悲光明に觸ますれば、言ふに言はれぬ忝なさ有り難さを感じ、恰も迷ひ子が慈母に遇へし如く盲人の眼が開けし如く飢て食を得たるが如く渴して水を得たるが如き嬉さを覺え、之れと同時に十方世界に群生を以て己れと同行の如くに



觀し、未來生々世々を以て無限の活動時間なりと觀する様になるものです、此觀念が起れば上を敬ふのも下を憐むのも社會を救濟するのも國家に報効するのも、盡く自己の本分天成の職務と明らかにせられて毫末も名譽とか利益とかいふ野心が無くなるものである、此信念を以て國家に對する時は國家と自己とが一體になり、此信念を以て祖先に對する時は祖先と自己とが一如となる、先帝陛下の御製に「目に見へぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけり」と仰せられしが如きは、正しく先帝陛下の御信念です、吾々も此御信念に倣ひ奉る時は、現在の儘にて高天原の御神々と交はり奉り十方淨土の諸佛諸菩薩と親しみ奉ることも出来るのである、天桂禪師は末後に徳島城主蜂賀侯に教ゆるに「齊家治國も亦菩薩の行道なり、篤く仁政を鋪き上下相信じて乖戾あること莫れ」といふを以てせられた、此意味から見れば「忠孝仁義も亦佛陀の妙行なり、専ら國家に奉じ一身一家の徳を修め進んで國運の發展に努力すべし、是れ報恩の行持なり」といふことが出来る、斯くなければ生きた佛教とは申されまじ、試みに現代の有様を見られよ、我が國民は果して此信念が健全に養はれつゝあるであらうか、複雑なる社

會の一隅に非法不義の行はるゝことは是非なきこととするも、國民の上流に位する人々の言動は信念ある者の振舞と思はれませうか、佛敎の精神は果してどれ程まで國民の胸裏に注入されて居るであらうか、徒に口聲の念佛や布施物の多少のみを以て佛敎の成績を判断することは出来ぬ、高等官に瀆職の事件あり堂々たる代議士に醜き運動の行はるゝあり、學者に信仰なく、富豪に同情乏し、社會に紀律の見るべき無く家庭に典禮の據るべき無し、利の爲めには兄弟相争ひ、名の爲めには同胞相誹る、口に愛國を説て身に私利を營み、筆に盡忠を叙して心に私慾を圖る、社會の全面には不斷にかやうな醜陋なる空氣が流通して居りはせまいか、我が兩陛下の聰明叡智に在ます此等の状態を御覽あらせられての大御心の中はいかゞあらせられ給はんと察し奉れば、實に慚汗の背に徹するを禁ずることが出来ぬ、故に吾々は極力此等の惡空氣を一掃して、相互に國民の品性を高め産業の發達を圖り家庭の改善を期し社會の風紀を革め内外表裏なく忠孝博愛の美德と勤儉力行の美風とを刷新し、以て國家の大恩に報い陛下の赤子たるの本務を盡さぬばなりませぬ、是れ即ち報恩の第一義たる吾人本分



修養訓話  
の行持まもりであります。

佛敎  
道德修養訓話終

大正五年三月二十三日印刷  
大正五年三月五日發行

佛敎  
道德修養訓話  
定價金三拾六錢

不許  
複製

編輯兼  
發行人  
峯 玄 光  
東京市麻布區新網町一丁目三十二番地

印刷人  
窪 政 鉄  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所  
秀 英 舍  
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所  
教 文 社  
東京市麻布區新網町一丁目三十二番地  
(振替東京七六六貳)

●大賣捌所

東京芝  
露月町

鴻 盟 社

東京麻  
布飯倉

森江書店



新井石禪老師著

# 曹洞宗法話大全

全一冊大版四百頁定價壹圓五錢送料貳錢

## 目次

- ▲新年禪話
- ▲七福神禪話
- ▲大般若會法話
- ▲涅槃忌法話
- ▲彼岸會法話(その一)
- ▲彼岸會法話(その二)
- ▲釋尊降誕會法話
- ▲釋尊一代記法話
- ▲五蘭盆會禪話
- ▲追善の功德
- ▲兩祖忌法話
- ▲兩祖の慈訓
- ▲達磨忌法話
- ▲釋尊成道會法話
- ▲父母の心得
- ▲家
- ▲佛教と青年
- ▲佛教と女子
- ▲家庭の佛教
- ▲禪の修養

進歩せる時代には進歩せる説教を要求す本書は此の要求に  
 應じて世に出現せるものにしてその蒐録する所は曹洞宗古  
 來の大法要たる二祖三佛會を初めとし春秋彼岸會大般若會  
 孟蘭盆會近來多く世に要求せらるゝ婦人會青年會家庭法話  
 禪學會等に至る約二十席の模範的説教を示せる者著者新井  
 老師の卓絶せる人格該博なる學識徹底せる説明巧妙なる比  
 喩豊富なる引例は本書に於て最も能く發揮せられ加ふるに  
 峯玄光師が各章末に附せる參考欄には適切なる古今の事項  
 を網羅すその一例を擧ぐれば「釋尊降誕會」の下に於ては  
 降誕の聖地たる藍毘尼園が如何にして發見せられたるか而  
 してその現狀は如何等を詳細に説明し更に「釋尊御一代記  
 法話」の下に於ては佛傳に關する經論及び近著二十有餘種  
 を解説し「兩祖忌法話」の下に於ては詳細なる兩祖の年譜  
 を掲げたるが如き從來の説教本に見るを得ざるの特色也

新井石禪老師每號執筆

# 道之枝折

毎月一回五日發行一年分前送金振替料共計三十一錢

- 「道之枝折」は曹洞宗唯一の施本用雜誌也
- 「道之枝折」は每號新井老師の法話を掲載す
- 「道之枝折」一冊を懐にすれば一席の説教を爲し得べし
- 巧妙なる法説と豊富なる實例と適切なる譬喩とは「道之枝折」の特色也
- 體裁優美内容豊富價格至つて廉他の雜誌の企及を許さず
- 見本は三錢郵券送附あれば直に送本す

發行所 東京 芝罘 丁目一 新網 麻布 町目一 丁目二 番地 文教社 振替 東京 七六 六二

賣捌所 東京 芝罘 町目一 鴻盟社 飯倉 森江書店

發行所 東京 芝罘 丁目一 新網 麻布 町目一 丁目二 番地 文教社 振替 東京 七六 六二



面 貌 生 崇 敬 感 謝 情 然 油 起 顧 如 け

我 國 未 曾 有 之 特 色 金 寫 真 位 牌

新 案 特 許

弊社ノ新案登録ニ係ル萬世不變色金寫真ハ普通紙寫真又ハ肖像畫ヲ金地ニ焼付ケテ原物ト寸毛ノ相違ナク影スルモノナレバ金色燦然トシテ光ヲ放チ其質全ク古來ノ蒔繪ニ異ナル所ナク百年二百年ハ愚カ永世ニ涉リテ毫モ變色ノ憂ヒナシ此ノ點ハ御疑念無之様特ニ願ヒ上候



- 佛壇佛具類ハ品質精巧價又廉
- 香奠代用ニ金寫真位牌切手調進
- 代理店希望ノ方ハ御申込相成度又定價表ハ無代送呈ス

東京赤坂三丁目一三番地 株式會社 振替 東京 四二五三



325  
399



終